女神の使者

Mr.ミカン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
女神の使者

【Ｎコード】
Ｎ０２８４Ｊ

【作者名】
Ｍｒ．ミカン

【あらすじ】
学校が終わり、家に帰ってお風呂に入っていたら：声：が聞こえてきて。ヤークス帝国が一夜で滅亡したあと、いくつもの国が建国された。その中でも特に力のある国が五つあった。『五大国』五大国の中の一国、　ウィルヘルム王国。神殿で祈りを捧げていると、謎の声が聞こえてきて・・・。◆◆◆◆この小説は異世界召喚物です◆◆◆

1話　始まりの赤い月（前書き）

登場人物名や読んでいて、これは・・・盗作？と思ったら言ってください。

私的には盗作をしているつもりはないのですが、こんなにも多くの作品があるので、内容が似てしまうかもしれません。

1話　始まりの赤い月

「神よ！私を助けたまえ！このものに天罰をあた〔ザシュッ〕ゴフッ」

「クックック・・・　もうすぐだ
もうすぐで・・　さぁ怯えろっ！憎めっ！その血と肉を我に捧げよ！」

言葉を発した男は、人間だったものに再び剣を突き刺した。
その直後、男と人だったものは床に夥しいほどの血を残して消えてしまった。
その血には月が映り、その月は赤く、光っていた。

カラーン　カラーン

鐘の音が鳴り響くこの部屋には、数十人もの人が膝をついて祈りを捧げていた
皆、一様に部屋の中央にある正方形の台（祭壇）に頭を下げていた。

ここは、ウィルヘルム王国の首都マドリガルにある、女神神殿である
ウィルヘルム王国は、かつてハルクセイド大陸を統治し隆盛を誇っていたヤークス帝国が一夜にして滅びた時に、独立を果たした国の一つである

王国の東から南にかえて高い山々が連なり、北には恐ろしい魔物や魔獣がいるアーマインの森がある。
南に森、南西には山脈という自然に守られた王国であり、ヤークス帝国が滅亡したあと、独立した他の国にはない自然の要塞を駆使して周辺国の進行を防ぎ、五大国の一国に名を連ねた。
初代国王であるウィルヘルムの政策により、学院を設置し他国から優秀な者を教師として招くなど、勉学にも力をいれてきた。
それにより建国以来１００年間、民の生活水準は大陸一であった。

しかし隆盛は長くは続かなかった。第八代国王　ルックウッド。彼の出現により財政は破綻し、民の生活は一変した。それに追い打ちを掛けるようにアーマインの森から魔物が出現し、村々を破壊し田畑は荒れていった。

他国は国力が衰えたと知ると軍隊を派遣し、侵略を開始した。焦ったルックウッド王は、子であるウェールズに国を任せ姿消した。
国を任されたウェールズは王となり王国から兵を募り弟であるトランと親友であるロザンと共に兵を指揮し侵略者を国外に追い出した。
これによりウェールズは‼王‼と民に認められた。そしてウェールズは国を起こして政策進め、財政難を乗り越えるために動き出した

カラーン　カラーン

今この神殿にいるのは、ウェールズ国王とその妻エカテリーナ王妃をはじめとする王族、臣下である大臣、護衛のための近衛騎士団だけである。

彼等は日課である神殿で祈りを捧げた後、何時ものように政務に励
むだけであった
そう、何時もなら・・・

2話　日常の終わり

キーンコーンカーンコーン
今日最後の授業が終わり、鞄を持ち部活に向かう者、教室に残り友人達としゃべる者、さっさと家に帰る者、いろいろな生徒がいる。
日本（ひもと）　凜（りん）もその中の一人だった。

「り～ん！今日どっか行かない？おなか空いちゃって」
「おっ、いいねぇ～！あたしも参加！」
「香奈ちゃん達、相変わらず元気だねぇ！別にいいよ」
「じゃあ、由美も誘おーよ」

凜は三年前、交通事故により両親をなくした。生きる気力を失った時に助けてくれたのは、隣に住んでいた香奈と香奈の両親であった。凜の両親と香奈の両親は親友であったので、両親をなくした凜をすごく心配していたのだ。

「じゃあ、そのあと服見に行こうよ」

凜は何時ものように学校を出てご飯を食べたり、買い物をしたりしながら帰路についた。

「ただいま・・・ん？」

（いつもより空気が暖かいような気が・・・気のせいか）

毎日同じように過ごしながらも、凛は日々の充実を感じていた。

「よ～し！御飯は食べてきたから、あとは宿題をしてテレビ見てお風呂に入って、今日は終わり！」

（今日も頑張ったかな、私）

いつものように宿題をして、１０時にドラマを見終わった。

（あっ、もうこんな時間、お風呂入らなきゃ）

脱衣所で服を脱いで、体を洗い浴槽に入った時だった。

――ケタ　――ツケタ

「えっ！なに！？」

ミツケタ　ミツケタ

「えっ！なに言って・・・。っ！？」

その直後、目が眩むような光が凛を包みこんだ。

（どうなって・・・）

光がおさまった時、凜は消えていた。

オネガイ・・・

不思議な、しかし綺麗なよく澄んだ声だけが風呂場に響いていた。

3話　謎の声と黒髪の少女

この日、ウェールズはいつものように祈りを捧げていた。数分の祈りのあとそれは起こった

「女神よ！我が民と国をお守り下さい！恵を与えて下さい」

ウェールズの声自体は、小さく呟き程度だったが神殿内にいる者達にはよく聞こえていた。
祈りを捧げ終わったあと、王族や大臣達が政務のために神殿から出ようとしたときだった。

「待ちなさい。ウィルヘルム王国国王よ。」

「っ！？誰だっ！？」

ウェールズの声に反応して近衛騎士団長は、ウェールズの傍により何処から何が来てもいいように身構えた。それを見て固まっていた近衛騎士達は皆、王族の周りを警戒しはじめた。
大臣達は戦いの心得のある者は身構え、ない者は目に見えて動揺し王の様子を伺った。

「クスクス
そう身構えないでください。私は初代国王ウィルヘルと契約を交わ

したモノ。」

その声は明らかに祭壇の上の女神像辺りから聞こえていた。

「・・・」

ウェールズや近衛騎士団長も固まって祭壇を仰いだ。中にいる者達は一言も話せなかった。何故なら今まで声が聞こえたなんて聞いたこともなかったからである。

「っ！？なんと！」

ウェールズが絞り出せた声はそれだけだった。

「禍を齎すものが、西の果てよりやってきます。黒の剣により大陸中の民の血が流れるでしょう。」

その言葉を聞き、直ぐさま正気に戻ったウェールズは片膝をつき、祭壇に向かって頭を下げ、問い質した。

「女神よ。私ごときがお尋ねするのは失礼かもしれませんが、お許し下さい。黒い剣とは何なのですか？禍とは？
我が国は今、前国王が引き起こした財政難に苦しみ、民達はアッパード帝国や魔物の侵略に怯えております。」

「国の剣は、ひとの死肉と血によって創られる破壊の剣。
アッパード帝国は既にその刃にかかっています。

結びなさい、大陸中に絆を・・・」
誰もが声を発っせずにいた。
アッパード帝国とは、ウィルヘルム王国の西に面する国である。五大国一の軍事力を誇り、国境を城壁で囲い込み、自国領の町や村にも城壁建てている要塞都市ならぬ要塞国家である。

何分経ったか。最初に正気に戻ったウェールズが大臣と宰相に「会議を行う。重臣達を集めろ」と命令しようとした時だった。
ピカァーーーー
眼も眩むような閃光(ひかり)が神殿内照らした。
皆一斉に腕で眼を隠し、辺りの気配に気を配りながら閃光がおさまるのん待った。

「うわっ!?なんだこれは?」
「くそっ!眼がー」

謎の閃光を直視してしまった者も何人かいるようだ。閃光がおさまっても眼が眩み視界の戻らない者が殆どだった。
徐々に視界が回復し、誰かが祭壇を見て呟いた。

「め、女神・・・」

先程までは祭壇の上に確かにあった女神像が消えて、そのかわりに黒髪の裸の少女が浮いていた。

最初に動いたのは王妃であるエカテリーナと第一王女であるカトリーナと皇太子妃であるルーナだった。
エカテリーナは黒髪の少女容態を確認し、カトリーナは侍女を呼びに、ルーナは男共を神殿からたたき出した。

しばらくして黒髪の少女の容態を確認し終えたエカテリーナが溜息ついた時、カトリーナが侍女を連れて、男共を神殿からたたき出したルーナがやってきた。

「エカテリーナ様、彼女の容態は？」
「大丈夫ですよ、ルーナ。気を失っているだけです。」
「ふぅー。それは良かったですわ。それにしてもお母様、彼女はいったい・・・。」

ルーナにたたき出された男達は、会議の間へ移動中だった。
口々に先ほどの黒髪の少女の正体を推察し話し合っていたが、どれも結論にはいたらなかった。

ウィルヘルム王国皇太子であるフレデリックもその中の一人だった。

「父上。彼女はいったい何者なのですか？それに神殿で聞こえた声も・・・」

「我にもわからん。だが、女神と関係があることは確かだろう」

「黒髪など見たことがありませんからなぁ」

「まぁ全てはあの娘が起きてからだろう。」

「ロザンの言う通りだ。まずは議論せねばならんことがある。キングリー！」

「はっ！」

何処からか黒衣を纏った小柄な男が現れた

「あの娘に害があるとは思えんが神殿に行き王妃達を守れ。何かが起こってからでは遅いからな」

「神殿内に入っても？」

「・・・構わん。王妃達を任せたぞ」

「はっ！」

キングリーと呼ばれた黒衣の男は消えていった

「ウェールズ国王。私達はいかがいたしましょうか。」

「お前達、近衛騎士達は各騎士団に女神の話を伝えろ。あの娘のことはふせておけ。」

「はっ！おいビル、「はっ！」このことを各騎士団に連絡しろ。万

が一娘の事を聞かれたら客人だといっておけ」

「はっ！ハンス、ジャック行くぞ。ついてこい」

（やはり父上達でもわからんか。何か不思議な感じの娘だったなぁ。）

会議の間に着き、中へ入ると重臣達がほぼ揃っていた。

（忙しくなりそうだ・・・）

その頃、エカテリーナ達は侍女を連れて客室に来ていた。
ベットを囲むようにして立ち、ベットには、もちろん件の少女が横たわっていた。

「母様。お気づきでしょうか？彼女の髪、普通の平民とは思えないほど艶やかです。先ほど肌も見ましたが滑らかでした。」

「ええ。・・・どこかの貴族の令嬢もしくは王女かも知れませんね。」

「はい。しかし、エカテリーナ様、黒髪の者など見たことがありません。」

「・・・。今は考えても答えは出ないでしょう。リミス」

「はい。」

リミス・ティラミス。この城の侍女長である。

「この者を頼みましたよ。「はい」では、いきましょうか、ルーナ、カトリーナ」

「「はい」」

エカテリーナ達は会議の間に向かっていった。

「では、行きましょうか、ルーナ、カトリーナ」

「「はい」」

エカテリーナ様達はこの部屋から出ていった。

（確かに、この娘平民には見えないわね。何者なのでしょうか。エカテリーナ様達もよくわかっていらっしゃらないような感じでしたし・・・）

リミスはこの少女のことは考えたがわかるはずもなかった。

（考えても仕方がないですね。）

「アリス。「はい、リミスさん」あなたにこの方の世話をお願いします」

「わかりました。お任せ下さい！（やった～！さぼれる）」

「（意気込んでるのにこんなこと言うのは可哀相ですが・・・）この方は王族の客人です。間違いのないようにお願いしますよ。」

「はい。わかりました」

「（あれ、以外と平静としてますね）では、皆さんいきますよ」

「「はい」」

二人の思考にはズレがあるようだ

ミリスは他の侍女を連れて客室から出ていった。

（頼もしくなりましたね、アリス）

そんな風に思いながら扉を閉めた時・・・

「ふぇっ！？お、王族！？」

と、聞こえ

（前言撤回ですね・・・）と侍女長が思ったそうな。

4話　会議とほら吹き

「・・・・・」

集められた重臣達は誰も言葉を発せずにいた。
ここは会議の間。先ほどの出来事を重臣達にウェールズが話したのである。もちろんあの娘のことは伏せてあったが。

（ふん。何も反応できぬかこの腰抜けどもが。もっと驚くことがあると言うのに）

この国の外務大臣、ロザン・ヨロプスはそう思った。
ロザン・ヨロプス
前の戦で国王ウェールズとその弟トランと共に戦場に立ち、その死神のような武力によって前線で敵の士気をさげ、味方を鼓舞した人物である。その強さから‥炎帝‥と呼ばれ他国から恐れられた。ウェールズの幼い頃からの親友でもある。

（しかしウェールズ。あの娘をどう話すつもりだ）

そう、あの娘である。
神殿で女神像と入れ代わってでてきたなどと言えば、自分の益しか考えぬ奴らだ。自分達の家の発展のために媚をうって、取り込むだろう。
と、ロザンは考えていた。

勿論、賢王と呼ばれるウェールズもそう考えており、自分の本当に信頼出来る者しか神殿内に入れておらず、伝えていなかった。

「陛下。ここは戦争に備え民に税を納めさせるべきです」
「そんなことしてどうする！民の生活が今、困窮しているのをそなたも知っておろう」
「なら、いかがして軍資金を調達するのだ。国に資金がないのだからしょうがないであろう！」
「口を慎まぬか。それなら、何故か金があるお前達が出せばよかろう。何故そんなに金があるのか・・・」

そう、この王国に金などないはずなのに一部の重臣達の家は大きく、今も増築している状態なのだ。横領や裏切りは確定しているのだが証拠がなく、前王のせいで王権も堕ちているので、家宅捜査も出来ない状態なのである。

「何を！私達、自領の民はそなた達の民より勤勉なだけだ！そなた達の民がしっかりと働いていないだけではないのか？」
「そうだ！我らを疑うのは止していただきたい。それに民は領主に似ると言う。そなた達領主が不真面目であるから民達も働かないのではないのか」
「「「なんだと！！！」」」

ある重臣の一言で会議の間は一触即発の状態になった。全員が席から立ち上がった。

（何をやっとるか・・・）
この王国の宰相　ロード・ロックワードは思った。
「何をやっとるか、ウェールズ国王の御前であるぞ！静まらぬか！」
宰相の言葉で口々に怒鳴り合っていた重臣達は渋々だが黙って席に座った。
全員が席に着いたのを見たウェールズは唐突に口を開いた。
「皆に、伝えねばならんことがもう一つある。」
（えっ！？今言うのか？）
ロード、ロザン、フレデリックなど神殿内にいた面々は、明らかにタイミングが悪いと思い話題を変えようとしたが、遅かった。
「今朝、我が娘カトリーナがお忍びで城下に行ったとき、何者かに襲われた。
幸い通りがかった旅の者に助けられことなきをえた。」
（（（は？））））
「しかしその者が眠りの魔術をうけ、今客室で寝ておる。
カトリーナの恩人ではあるが、何者かわからぬゆえキングリーを付けておる。」

（（（いや、無理があるだろ・・・））））

ウェールズの言葉を聞いた重臣達はロザンらを見て、驚いている顔を見て真実だと判断した。
はからずしも重臣達に信じ込ませる事に成功したのだった。

「ウェールズ様！その様な報告は一切聞いておりません！」
「そ、そうです、父上」
「そりゃそうだ。私も先ほど聞いたばかりだからな。まぁ、今は起きるのを待つとしよう。」
「わ、わかりました」
「あ～、皆先ほど資金のことだが、今はどうしようもない。明日もう一度会議を執り行うから、よく考えてといてくれ。」

「「「はっ」」」

「エカテリーナよ。あの娘はどうだった？」
「まだ眠っているようでした。今は侍女に任せています。」
「ふむ。あの娘は我が王国の豊饒の女神となってくれるのだろうか・・・」

王の政務室でウェールズとエカテリーナは今後のことについて話し

合っていた。
コンコン
「誰だ？」
「近衛騎士団長ロナードです。トラン様がお帰りになられました。」
「わかった。出迎えに行こう。トランから吉報が聞けるように祈ろうか。なぁ、エカテリーナ」
「そうですね。では参りましょうか。」
二人は政務室から出ていった。

5話　目覚めと依頼（前書き）

登場人物が多くきたので、いつか紹介するかもしれません。

感想など、随時受け付けておりますのでよろしくお願いします。

5話　目覚めと依頼

「んっ・・・。」
（あれ？目覚ましは？）

凜は窓から差し込んでいる穏やかな日差しで目覚めた。

「う～ん。よし今日も一日・・・っ！？何ここ！？」

そこは自分の部屋ではなく見たことがない部屋だった。壁はみるから
らに上質な木材を使っており、窓はとてつもなく大きく、本棚には
見たことのない分厚い本が敷き詰められていた。

「うわっ！なんじゃこのフカフカ感」

凜が今まで寝ていたベットも天幕があり、枕も大きく人が三人よこ
になっても十分な広さだった。

（お、おちつけ私。そう深呼吸、深呼吸。）

心を落ち着かせもう一度見渡して見るがやはり見知らぬ部屋。

（どうなってんの？
昨日、確か家に帰ってきて、宿題して、ドラマ見て、お風呂に入っ
て・・・っ！そうだ！それから変な声が聞こえてきて・・・
そこから記憶がない・・・あっ、窓から外を見たら何かわかるかも）

窓辺に移動して外を見てみると、手前に花畑と石で出来た城壁があり、その向こうには煉瓦造りの家々がどこまでも広がっていた。

（えっ？ヨーロッパ？）

その町並みは明らかに日本のそれではなく、どちらかというとヨーロッパよりの建築様式だった。

（いや、まず日本にこんな城壁とかないか。ここはいったい・・・）

コンコン

「δνξζωθι。」

現状が理解出来ず窓のそばで呆然としていた凜の耳にノックの音と誰かの声が聞こえた。

ガチャ

振り返ってみると緑色の髪の女性と茶色髪の少女がドアの前に立ち、こちらを目を見開いて凝視していた。何秒か経ち、居心地が悪くなった凜は会釈し二人に声をかけたとき

「あの「☆★○@&#£%！&#§☆★$¥%£」・・・」

緑髪の女性が茶色の髪の少女に何かを伝え、こちらに向かって頭をさげ足早に退室していった。

その場に残された凜は気まずさからどうしたらいいかわからず

茶色の髪の少女に苦笑いで笑いかけた。

茶色い髪を肩辺りまでのばしているアリスは今、侍女長であるリミスとともに王族の客人の部屋へ向かっていた。

「もう起きていますかね～？」

「そんなこと見るまでわかる訳がないでしょう」

黒髪の少女は昨日起きることはなかった。
エカテリーナ王妃の命によりミリスから黒髪の少女の世話を頼まれたアリスは、リミスと共に彼女の容態を確かめに来たのだ。

「さぁ、着きましたよ。しっかりしてくださいよ」

「は～い」

コンコン

「失礼します」

リミスの言葉に元気よく返事をしたアリスは、リミスが開けた扉へと入り、そして窓辺に佇む人物を見て息を呑んだ。
黒髪が日の光を浴びて輝き全体と相俟って何か神懸かった感じがした。
その少女はこちらゆっくりと振り向いたあと、会釈した。
ミリスは正気に戻ったあと

「国王様達を呼んできます。ここは頼みましたよ。」
とアリスに告げ、足早に去っていった。我にかえったアリスはこの状況に戸惑いオロオロしていた。すると黒髪の少女がアリスに微笑んでくれ、その優しげな笑顔に緊張がほぐされていくのをアリスは感じた。

（うわ～、目も黒色だったんだ）

落ち着いたアリスは役目を果たすべく少女に近付き、話かけた。

「私はアリスといいます。貴女のお名前を伺ってもよろしいですか？」

話し掛けられた少女は困った顔をして首を傾けたあと
「┘└┬┬┬┬┐。」
と言った。
意味がわからなかった。

（ふぇ～ん！リミスさ～ん！早く来て～！）

凜は、困っていた。話し掛けられたが何を聞かれているかわからなかったのだ。
（うーん、どうしよ。何かいい方法は・・・あっ、そうだ）

凜は自分の胸に手をあてゆっくりと言葉を紡いだ。

「り・ん」

茶色髪少女は何をいってるか理解したようで、手を凜に向けて

「るぃ～ん」
「り・ん」
「り～ん」
「そう！凜！」
「リン！リン！リン！」

名前がわかったことが嬉しかったのか何度も「リン」と、言っていた。
凜が手を少女に向けると意味に気付いたようで、

「ア・リ・ス」
「アリス！」
「☆○！アリス！」

気持ちが通じたような気がし二人はどちらからでもなく笑いあった。
すると、

コンコン

先ほどと同じようにノックの音が聞こえ、扉から先ほどの緑髪の女性と見覚えのない人達が入ってきた。
皆一様に見るからに高そうな服を着ており、鎧を着ている者もいた。
凜が訳もわからずオロオロとしているとアリスがその集団に頭を下げ、何か言った。

その言葉を聞き美しい金髪を持つ綺麗な少女が凜のもとにきて、何か詩のようなモノをを紡いだあと
自分のデコと凜のデコを会わせた。

「終わりました。」

（綺麗な声・・・って！？あれ？）

「な、なんで声が！？」

「初めまして。私はカトリーナ・フランシス・ウィルヘルムといいます。
話をし易くするために意思疎通の術をかけさしていただきました。
お名前を伺ってもよろしいですか？」

カトリーナと名乗った少女は可憐に微笑んで凜に名を尋ねた。

「あの、日本凜といいます。術というのは何ですか？」

「え、えぇ、術というのは魔法ともいい、魔力を使用して心に念ったこと具現化する物です。」

「ま、魔法ですか！？」

「は、はい」

カトリーナと名乗った少女は困った顔をして後ろにいた人達に助け

を求めた。

（あれ、私なんか変なこと言った？）

「ふむ。リン殿よ。私はこのウィルヘルム王国の国王ウェールズ・フランシス・ウィルヘルムだ。魔法をご存知ないのだろうか」

（ウィルヘルム王国？王様？な、なにそれ？）

「は、はい。空想では知っていますが、本物は見たことがありません」

「そう固くならんでもよい。ふむ。どうやらそなたは異界人のようだ。この世界の者なら魔法を知らぬ者はおらんからな。」

「い、異界人ですか？」

「そうだ。」

ウェールズ国王は、この国の現状や昨日の出来事を語り、女神像の代わりに出てきた事をより詳細に語った。そして重臣達にその事を伝えると凛に取り入る恐れがあるため、苦肉の策で
カトリーナが襲われたが、たまたま通り掛かった凛がそれを助け、その時に眠りの術を受けて眠っていると重臣達に話した、と言った。

「リン殿よ。すまぬがどんなところで生活していたか教えてくれぬか。」

別に隠す事でもないので凜は日本の事について話した。時折、ウェールズ国王をはじめとする面々は興味深そうに頷いたり驚いたりしていた。
短い会話でウェールズの人柄を掴んだ凜は、身体の緊張が取れ普段通りに会話出来るようになった。

「と、まぁこんな感じですね。」

「ふむ。魔法がなく王がいない世界か・・・実に興味深い。かなり技術が進んでいるようだな。どう思う？ロザン、ロード、フラン、トラン、エカテリーナ？」「そうですなぁ・・・。問題ないかと思います、ウェールズ様。」
「ふむ。俺もロード宰相と同意見だ、ウェールズ。」「私もそうですね。」
「もちろん私も賛成よ、あなた。」
「僕も異論はありません、兄上。」

ウェールズは子供達に視線をやったが反対意見は出てこなかった。

（えっ、何の話？）

「リン殿。そなたに折り入って頼みたい事がある。」
「な、何でしょうか？」

「我等をその知恵で助けてくれぬか。」

「・・・は？」

予想外だった。

ウェールズ歓喜していた。彼女からニホンという国を聞き、その技術の高さに。
（これは昨晩皆で考えた事が実現出来そうだ。）

実は昨晩、ミリアとアリスに事情を打ち明け、神殿内にいた者達と凜の事を話し合っていたのだ。
それで決定した事が、
彼女の知恵を借りて王国を建て直そう。
と、いうことだった。　彼女の出現の仕方があんな感じだったので、今の状況を打開出来る何かを持っている、と信じて疑わなかったのである。

彼女の国の事を聞き王妃や宰相らに確認したが異論はなかった。

「リン殿よ。そなたに折り入って頼みがある。」

「な、何でしょうか？」

「その知恵で我等を助けてくれぬか？」

「・・・は？」

予想外だったのかリンは呆然としていた。そんな様子をみて
難しく考える必要はない、出来る事だけをしてくれればよい。
と、伝えた。

「どうだ、リン殿。受けてはくれないか？」

「えっ、でも・・・」

「私達からもお願いします。」

王妃達からもお願いされ、断る事が出来なくなったのか、渋々ながら引き受けてくれたようだ。

「リン殿、感謝する」

「あっ、呼び捨てでかまいませんよ」

「ふむ。では、これからはリンと呼ぼう。後日ちゃんとした位も授けるゆえ、それまで待っていてくれ。」

そう言うと、ウェールズは政務があるので詫びをいれて退出した。王妃達も自己紹介が終わったので、皆で会議の間に向かった。

ウェールズさんが出ていったあと、後ろにいた人達が寄ってきた。

「はじめまして、リン。私は王妃エカテリーナ・ヨロプス・ウィルヘルムといいます。これからよろしくお願いしますね。」

「私は宰相のロード・ロックワードといいます。よろしくお願いします異界のお嬢さん。」

「僕はウェールズ兄さんの弟トラン・アレクセイ・ウィルヘルム。一応、魔法騎士団長だよ。よろしくね。」
「俺は外務大臣ロザン・ヨロプス。王妃とは兄妹だ。よろしく頼む。」
「皇太子のフレデリック・フランシス・ウィルヘルムだ。よろしくな。」
「クスクス。もう少し愛想よく出来ないの、フレッド。ごめんなさいね、リン。私は皇太子妃のルーナ・アラステス・ウィルヘルムよ。また今度御飯をご一緒しましょうね」
「はじめまして、リン殿。近衛騎士団長のロナードステューコフと申します。今後ともよろしくお願いします。」
「私は侍女長のリミスといいます。」
少し会話をしたあと、エカテリーナさん達は仕事へと戻っていった。
「リン、これからよろしくね。」
「よろしくお願いします、カトリーナさん」
カトリーナさんは何故か驚いたような顔をした
「リン、敬語なんてやめてちょうだい。私は友達になりたいんですから。」
「わかった。これからよろしくね、カトリーナ。」
「はい！では私はこれで。アリス、リンを頼みましたよ。」

「はい！カトリーナ様」
「じゃあまたね、リン。」
カトリーナが出ていった後、アリスがリンに
「リン様。朝食を召し上がりますか？」
と言った。凜は、「様付けなんてむず痒いから止めて」と、アリスに言ったが「客人を呼び捨てになど絶対に出来ません」と、アリスが猛烈に拒否したため渋々了承した。

「では、直ぐにお持ちしますね。」
「あっ、アリスは御飯食べた？」
「いえ、まだですが」
「じゃあ、一緒に食べよ」「い、いえ、私ごときが一緒に食べるなど・・・」
「アリスは私と一緒に食べるのが嫌なの？」

いえ、そんな訳では。と、アリスがまだ渋るので、食べながらこの世界の事について聞きたいから、といい説得した。
アリスはそこまで言うのなら、と一緒に食べる事を了承した。
「では、少しお待ち下さい。」

アリスが出ていったあと、凜は朝起きてからの事を思い返し溜息をついた。

（どうなっちゃうんだろ、私・・・。）

6話　朝食と説明

コンコン

「は～い」

「アリスです。朝食をお持ちしました。」

扉を開いてアリスがカートを持って入ってきた。

「直ぐに用意しますから待っていてくださいね。」

アリスはそういいながら部屋にあったテーブルの上に料理を置いていった。

「では、リン様。朝食の準備が出来ましたので、席にお付きください。」

「うわ～！スッゴい美味しそうだけど・・・多っ！？」

凛は用意された朝食を見て「どこの貴族の令嬢だ。」とつっこみ、次からは食べ切れないのでもっと少なくするよう交渉した。

アリスは「王族の客人なのだからこの位は用意させていただかないと・・・」と拒否したのだが、

「民の生活が困窮しているのに、国の役人が贅沢をしているのになどありえない。」というリンの言葉に感動し、それならばと了承した。

凛は、その時アリスの頬が少し赤く染まり、凛の見る目が潤み、ヤバイ気がしたが気付かない振りをした。

「リン様・・・。」

「え、えーと・・・。あ、アリス、早く食べよ。」

どこかにトリップしているアリスを「あっ、はい。そうですね。」と正気に戻し、ようやく朝食に取り掛かった。

「それはそうと、リン様はどのくらいこの世界についてご存知ですか？」

と聞いてきたので、「ウィルヘルム王国があって王様がウェールズさんってことだけかな・・・」と自分の知っている事を伝えた。

「そうですか・・・。では、全て話した方がいいですね。
ウィルヘルム王国のある大陸をハルクセイド大陸という。もともとはヤークス帝国がハルクセイド大陸全域を統治していた。しかし今からおよそ１５０年前、ヤークス帝国が一夜にして滅亡した。
ヤークス帝国の首都ストロングホールドでは何か戦った形跡はあるものの死体は一つも遺っていなかった。と言われている。
大陸中の学者がその原因を調査してきたが、未だに有力な説は出ておらず、死体がなかったことより魔物や魔獣にやられたのではないかと庶民の間では噂されている。

ヤークス帝国が滅亡すると七十余りの国が独立を宣言した。しかし、睨みをきかせていたヤークス帝国が滅亡すると、戦争を止める者がいなくなり、大陸中で戦争が勃発した。
その中で他の国々を侵略し勢力を拡大していった国が五つあった。
その国々は『五大国』と呼ばれた。

ハルクセイド大陸の南東に位置する豊饒の国ウィルヘルム王国、南西に位置する兵の国アッパード帝国、北西に位置する雪の国スノーキングダム、北東に位置する精霊の国フェアリーナ部族国家、四つの国の真ん中に位置し異例な商人の街サカイ。この5国が五大国である。当初、五大国の中で一番力を持っていたのはウィルヘルム王国だった。
しかし前国王のルックウッドが莫大な赤字を作りあげた。現国王ウェールズが危機をしのいだが、未だに民達の困窮は続いている。

そして、リン様が前代未聞の方法で現れた。と、まぁ、こんな感じですね。」

「・・・。なんか私、凄い時に現れちゃたみたいだね。」

「そうですね。そのお陰か皆さんとても期待していましたよ。」

「もちろん私もですけど。」というアリスに「期待しないでよ。」と凜は言いながら考えた。

（私、出来る事なくない？）

「ねぇねぇ、アリス。いきなりだけど、この国の収入源って何？」

「収入源ですか。そうですね・・・。前までは王国の北に位置するアーマインの森から良質な木材が採れていたのですが、最近では魔物が現れ、伐採どころではないそうです。
後は銅と鉄ですね。いずれも製錬に大量の木材がいるので、サカイから輸入していますが、金銭的に木材を大量に輸入出来ないため、

銅と鉄は余り製錬出来ていないのが現状です。」

「う～ん。それを聞くかぎりでは木材に代わる可燃材が必要か・・・。」

「そうですね。とは言いますが中々見つからないのが現実です。希望であった魔石も製錬に必要な火力を出すのには、まだまだ時間が掛かりそうですし、出せるのかもわかりません。」

「う～ん、そうだよねって・・・魔石？何それ？」

『あれ？言ってませんでしたか？』と宣(のたま)うアリスに『聞いてないわ～！ガオ～！』と突っ込んだあと、魔石について説明を求めた。
アリス曰く、魔石とは魔力が宿った石だという。
凜が『そのまんまかい！』とつっこむと『まだ、続きがあるんです～』と涙目になりながら言ったので、つっこむ事を止めてちゃんと聞いてあげることにした。
その時（アリスの涙目萌え～～！）とか思ったのは凜だけの秘密だ。

「魔石には色々な属性の魔力が宿ります。そして魔力の量、属性によって色の濃さや色が異なります。魔力量が多いと濃く、少ないと薄くなります。」

そして、火属性は赤、水属性は青、風属性は緑、土属性は茶色、電気属性は黄色となっており、魔力が空になっても、その属性の元素と触れ合わせておくと自動的に魔力が回復し、半永久的に利用出来るのだとか。

魔力が回復するには時間が掛かるそうだが。

例をあげるなら水属性の石は水の中に入れておくといいらしい。入手方法は電気属性以外は極めて簡単で、その辺に落ちているらしい。電気属性の魔石は雷が魔石に落ちないと出来ないらしく、希少価値が高いらしい。人工的に作れなくもないが、乾燥している北の方で静電気を魔石に貯える方法らしく、手間が掛かる割には火属性や水属性のように使い勝手が良いわけではないので、需要が低いらしい。物好きが買っていくぐらいらしい。

「ふーん、便利な物があるんだねぇ。」

ハルクセイド大陸は魔石と共に歩んできていて、私達の生活とは切っても切れない物ですからね。というアリスに魔法の火で鉄や銅を製錬に必要な火力が出せないかと聞くと、火力が足りないらしく、何人集めても無理らしい。

（それもそうか。銅や鉄には１０００度必要だからね。ん、鉄って銑鉄の事じゃないよね。銅も粗銅じゃぁ・・・。まっ、後でいいか。）

その後、ガールズトークでキャっキャっやっていると

コンコン

ガチャ

「リミスです。ウェールズ様がお呼びですので、会議の間にお越しください。あっ、アリス、貴女も来て下さいね。」

（うわ～。いきなり会議ですか・・・。）

7話　役職決定！闇と追う者

凜がアリスと一緒に朝食を食べながら話をしている頃、ウェールズ達は会議の間にいた。

「昨日、話に出た旅の者が今しがた目を覚ました。名はリン・ヒモト。彼女はアパデス山脈を越えてやってきたらしい。」

アパデス山脈。
ウィルヘルム王国の東に位置し、休火山であるリーゴン山がある。
鉄の採掘場でもある。

ウェールズはリンが未開の地の最果てにあるらしいニホンという国から来たことを伝えた。

「なんと！未開の地から！」
「未開の地から・・・。ありえない。」

重臣達がそう言うのも仕方ないだろう。何故なら嘘なのだから。

（ウェールズ！？）

エカテリーナは正気か？という目で夫を見た。

未開の地。
アパデス山脈の東側に広がる広大な土地の総称で、魔物が常に徘徊している。アパデス山脈を離れていくにつれて魔物の質も上がると言われ、国の軍はともかく、名のある傭兵でも近付かない場所であり、一万の兵を出しても十日ともたないと言われる。

そんな場所の最果てに国があり、そこからやってきた。そんな事を言う奴は正気ではないだろう。
重臣達は謀か否か判断する為に一度冷静になり、大臣達の様子を伺った。すると大臣達は皆、正気か？というような目で国王を見ていた。
それを見た重臣達は、謀ではないと判断し、次に国王が正気かどうか伺った。
もちろん、いつもと変わらない国王がそこにいた。
それを見て、本当にリンと名乗る者がそう言い、国王はそれをそのまま伝えただけだと判断した。
また謀らずしも、重臣達を騙せたのである。

「ウェールズ様。証拠もなく貴方様ががそのような話を信じるはずがありません。何か証拠となる物があったのですか？」

重臣の内の一人、魔法・精霊科学官長ミラン・ケーニッヒがウェールズに問うた。
彼は優秀な魔霊術師である。魔法や精霊術の研究を行い、新しい術を発明したりしている。
ウェールズの密命により重臣側の派閥に属し、誰が信用出来るかをウェールズに教えている。
しかし彼の力を持ってしても横領や裏切りの証拠はまだ掴めていないらしい。

それを聞いたウェールズは困った顔をしながら答えた。
「いや、残念ながら証拠はなかった。が、その国の技術は聞いた。」
ウェールズは凛に聞かせてもらった日本の技術を皆に伝えた。
「と、まぁ。こんな感じだ。」
「ふむ。実に興味深いですが、嘘かもしれませんな。」
「あぁ。だから少しの間、ミランの下に就かせようかと、思うのだが・・・。
事実であるのなら莫大な利益をえる事が出来、民達の生活がよくなるだろう。」
お前達の懐も潤うぞ、的なニュアンスを漂わせて締め括った。
それを聞いた重臣達は「民の生活がよくなるのなら」と了承した。
（何が民の為だ！自分の家の為だろうが！）
この場にいた皇太子であるフレデリックは重臣達の顔に浮かぶ笑みを見て、思った。
「ふむ。皆、一応は賛成してくれたようだな。では、リミス。リン殿を呼んできてくれ。」
「はい、王様。」

（ふぅー。第一関門は突破したな。）

リミスが会議の間を出ていくのを見ながら、ウェールズは内心で溜息を吐きつつ思った。

（はい、やって来ました。会議の間。）

リミスに連れられて会議の間へとやって来た凜は、その扉の重厚さに驚きながらも、内心、溜息をついていた。

（なんで私こんな所にいるの？）

コンコン

「リミスです。リン様をお連れしました。」

「入ってくれ。」

ギィィ～～、っとリミスが扉を開けて中に入っていったので凜もついて入った。

中はなかなか広く、扉がある壁の反対側の壁に天井までとどく大きな窓が三つあり、部屋の真ん中に大きな楕円形の机が置かれいた。その机を囲む様に２０人ぐらい椅子に座っていた。その中には、ウ

ェールズ国王をはじめとした今朝会ったメンバーもいた。今朝凜に会っていない人達は見定めるような目で見たり、品定めするような目で凜を見ていた。
凜はリミスに連れられてウェールズの向かいに座らされた。

「リン殿、今朝そなたが話していた事を皆で話し合った。しかし証拠がないため本当かどうか判断出来んのだ。だからリン殿には役職について、証拠となるものを作ってもらおうということになった。もちろんその間の住まい等はこちらが用意しよう。」

ここに来るまでに、リミスから会議での決定等を色々と教えてもらっていたため、割とスムーズに話は進んでいった。

「そこでリン殿には魔法・精霊科学官長のミランの下に就いてもらう事した。」
紫色のローブのような衣服を纏い顎髭の豊富な老人が凜に軽く頭を下げた。どうやらあの人がミランさんらしい。

「よってリン殿を副官長の役職に就かせる。」

「では、皆昼からの政務に精を出して頑張ってくれ。以上だ。」というウェールズさんの声に座っていた人達は席立ち会議の間から出ていった。
カトリーナが去り際に「今晩、御飯をご一緒しましょうね。」と言って出ていった。

「では、リン様。お部屋に戻りましょう。」

そう言うアリスに付いて凜も会議の間を出た。

「リン様はこのあと如何なさいますか？」部屋に戻る途中、アリスが聞いてきたが、今は何もすることがない。と、伝えると

「それではお風呂に入りませんか？」と聞いてきたので了承した。

「ではお風呂へ行きましょ～！」

何故かアリスはテンションが高かった。

「リンとかいう娘、どう思う？」

「嫌な時期に出てきたが、我々の邪魔にはならんだろう。取るに足らない存在だ。」

「そうですな。どうやっても奴らは運命を変えれることは出来ないでしょう。」

「あの娘も、容姿がかなり良かったですな～。この王国が帝国の手に落ちたら、王女達や皇太子妃と一緒に我らの奴隷とするのはどうでしょうか？」

「ふむ。そうしましょうか。」

薄暗い小さな部屋の中に八人の男達が話し合っていた。

「おっと。誰か来たようだ。では皆の者、計画が実行されるまで、くれぐれもばれないようにな。」

そう言うと男達は去っていった。
男達が去って少し経ったあと、ミランとロナードが近衛騎士数名を引き連れてやってきた。

「くそ！また逃げられたか。」

「ミラン様。奴らどうやって私達を察知しているのでしょうか？」

「それはワシにもわからん。一応この部屋を調べておこう。まぁ何も残っていないと思うがのぅ。」

ミランの命でこの部屋を調べたが何もわからなかったようだ。
闇がゆっくりとしかし確実に動き出していた。

8話　お風呂と噂とお誘いと

カッポーン

「うわー！ひろーい！」

「ここは一般大浴場ですからね。」

ここは、城に勤めている人なら誰でも入れるらしい。ちなみに、「役人様と一緒に入る訳には・・・」、と言うアリスを、さっきもこんな事したような。と思いながら

「私と入るのは嫌なんだ・・・。」と涙目で落とし一緒に入らせる事に成功した。

体も洗い終わった後、浴槽に飛び込もうと思っていた凜を止める者がいた。

「リン様。少しこちらに来てください。」

アリスは浴槽の横にある木製の四角い箱の傍に立っていた。
四角い箱からは木製の管が二本付いており、一本は壁へ、もう一本は浴槽へと繋がっており、どうやら浴槽にお湯を送っているようだ。
アリスの傍に行くと、アリスは四角い箱の蓋を開けた。中からは湯気が立っていた。

「リン様、中を覗いて見て下さい。」

アリスの声に従い中を覗いてみると、火が付いた赤い石と湯が入っていた。

「あの赤い石が火属性の魔石で、箱に入ってる水を温めてお湯にして浴槽に流し込んでいます。」

一本の木管から水を送り込み箱の中でお湯に変換、そしてもう一本の木管でお湯を浴槽へ。

「へ～、給湯機みたい。便利ね。ん、明かりも全部火属性の魔石なの？」

「はい、そうですよ。でもそれは裕福な方の家だけです。私の故郷なんかは木に火を付けているだけでしたから。」

（明かりは火か・・・。電気という概念がないのかな。）

質問もそのくらいにして、二人で湯の中に肩まで浸かり、ぬぼ～としていた。

「それにしても、リン様！」

「な、何！？

私もしかして、こっちのお風呂の禁止事項とかやっちゃった？って、あれ？あ、アリス！なんか目がヤバイよ！」

「なんてお肌が綺麗なのでしょう。あ～もうスベスベです～！」

「ひゃぁ！ちょ、アリス！ストップ！」

その後３０分、凜はお湯の中でストップの意味がわからなかったアリスに体を撫でられ続けた。大浴場前の廊下で「汚された」と頬を染め涙目になっている少女と、スベスベした手触りを思い出してうっとりしている侍女が歩いていたとか。

チャルシーは昨日の朝、カトリーナ様を助け、今朝魔法・精霊科学副管長の職に就かれた旅の者に用意された客室の前に来ていた。彼女はカトリーナ付きの侍女でその者をカトリーナ様の部屋までお連れするようういい使ったのである。

その旅の者を見ている侍女はアリスとリミス以外にいなく、リミスは話してくれなく、アリスに聞こうにも朝からその旅の者につきっきりらしく、姿をみせない。
カトリーナを助けた事から、旅の者は男性、かなりムキムキで女好き。と侍女達の間では噂されている。アリスが帰って来ないのはその男にえっちな奉仕をさせられているからである。と噂されている。この事を話し、怖いから。と断ったチャルシーにカトリーナは一瞬、目を丸くしたが、すぐに悲しそうな顔をして「あの方は私を助けた報酬として私の体を要求しました。」
だからこの部屋に連れてきてください。とチャルシーに言った。

チャルシーが出ていった後、カトリーナはお腹を抱えて笑っていたそうな。

（うぅ～、怖いですぅ。でもカトリーナ様の為なのです。）

コンコン

「は～い！開いてますよ～」

「し、失礼します。」

ガチャ

チャルシーは扉を開けた瞬間前も見ずに床に頭をつけた。

「私の体を差し上げますから、カトリーナ様だけはどうかお許しください。」

「・・・は？」

お風呂から上がり凛とアリス、ガールズトークでキャッキャやっていると、控え目に扉をノックする音が聞こえた。

「は～い。開いてますよ～。」

「し、失礼します。」

やけに震えた声が聞こえ扉が開いたと思ったら、青色の髪を肩まで伸ばした少女が部屋の入口で土下座していた。

（この世界にも土下座ってあるんだ。）

妙な事に感心していると

「私の体を差し上げますから、カトリーナ様だけはどうかお許し下さい。」

少しの間、世界が止まった。

「・・・は？」

まだ青髪の少女は頭を付けたままだ。

「あの～えっと、何いってるの？」

「あ、あぁ、すみません。この部屋の方はどこにいらっしゃいますか？ってアリス！大丈夫だった何か酷い事されてない？」

「え、えぇ。と何の話？」

チャルシーは侍女達が噂している事をアリスに伝えた。

「アッハッハッハな、何それ！お腹痛い！」

チャルシーは突然笑い出したアリスを訝しんだ。

するとチャルシーの背後から忍び寄る影があった。

「こら～～～！」

「キャァ～」

もちろん凜である。チャルシーは跳び上がって驚きアリスにしがみついた。そのせいで余計にアリスが笑いだした。

とりあえずアリスを黙らせチャルシーを落ち着かせた後、凜はチャルシーに噂は嘘だから、皆に言っといてと約束させた。

そして三人でカトリーナの部屋へと向かった。

（もうなんか疲れた・・・）

（カトリーナ様の嘘付き～）

チャルシーは今、凜とアリスとともにカトリーナの部屋へと向かっていた。

（でもリン様がいい人でよかったぁ。しかも美人たし、言うことなしです。）

と思いリンをみた。するとたまたま目が合い微笑んでくれた。

（うわー、かわい～ですぅ！）

女の子三人でキャッキャやっていると、カトリーナの部屋に着いた。

「カトリーナ様、チャルシーです。リン様をお連れしました。」

入室の許可をもらってから扉を開けた瞬間、凜が部屋の中へ駆け込んだ。

「カトリーナ～！あんた何変な事言ってんのよ～」

「キャァ～」

ワイワイやったあと、どちらともなく笑いだした。
それを見たチャルシーは目を見開いた。

（あんなにも楽しそうなカトリーナ様初めて・・・）
チャルシーが驚いていると、アリスが話し掛けた。

「すごいでしょ、リン様。あの人ならなんかこの国を変えてくれそうな気がするの。」

「・・・えぇ、そうですね。」
（えぇ、ホントにそんな気がする）

二人は凛とカトリーナが笑い終わるまで微笑んで見ていた。

アリスとチャルシーの二人がしみじみしているなんて露ほども知らない凛は、カトリーナにチョップし笑い合った後、何の用かをきいた。

「お母様とお父様が夕食を食べるから呼んできなさいと。約束もしてましたし、一緒に食べませんか？」

「あ～、食べるのは全然　構わないんだけど、私テーブルマナーとか全くわからないよ。」

「王族だけですし必要ありませんよ。」

いやいや、王族とかいるなら余計にいるじゃんとか思いながらも、凜は了承した。

「ありがとう、凜。チャルシー、アリス。あなた達はお風呂の用意をお願いします。」

「「はい、カトリーナ様。」」

そう言ってアリスとチャルシーは部屋を出ていった。

「では、行きましょうか。」

二人は王族の食堂へむかった。

（うわ～、緊張する～）

「そんなに緊張する事ないですよ。皆、仕事時は真剣ですけど、それ以外の時は優しいいい人達ですから。」

「あっ、そうそう。ミランさんとか来る？」

「ミランさんですか？」

「うん。ウェールズさんとミランさんとで仕事の話しときたいから。あっ、エカテリーナさんとか、いても大丈夫だよ。一応信用出来ない人はいない方がいいと思うけど。」

「・・・ニホンの事ですか？」

「うん、まぁそうと言ったらそうなんだけど・・・。あっ、アリスもよろしく。」

「わかりました。手配しておきますね。それと、夕食には私の妹のも、いますのでよろしくお願いしますね。」

「カトリーナの妹かぁ。どんな娘なんだろ？」

「ふふふ。楽しみにしておいてください。ほら、もう着きますよ。」

「うぁ～、緊張してきた。」

二人は大きな扉前まできた。扉の両サイドには騎士が立っていた。

「カトリーナ様、リン殿お待ちしておりました。では、扉を開けますので少しお待ち下さい。」

左側に立っていた騎士がそう言うと、扉がゆっくりと開きだした。

9話　夕食

王族食堂の中は意外と質素なものだったが、見たことのない料理が乗っている机や椅子は上質な木材を使っているらしくかなりしっかりしていた。
椅子にはウェールズをはじめとする王族が既に座っており、二席だけ開いていた。どうやらそこに座るらしい。部屋の四隅に一人づつ近衛騎士の甲冑を纏った人達が立っていた。ロナードは国王と王妃の傍に控えていたが、いつもの甲冑姿ではなく、ラフな物だった。
そして空席の横には、見た事のない金髪をポニーテールにした少女が座ってこちらを伺っていた。
カトリーナに顔立ちは似ているのだが目尻が少し上がっている為、強きな印象を受ける。どうやら彼女がカトリーナの妹みたいだ。
フレデリックは凛に向かって微笑み、隣のルーナは手を振っていた。
カトリーナに促されるまま椅子に座ったリンにウェールズが話し掛けてきた。

「すまんな、リン。無理に呼んでしまって。」

「いえいえ、私も一応ウェールズさんの臣下でもありますし、気にしないで下さい。」

それに食事は皆で食べた方が美味しいですし、と皆を感心させた後、食事が始まった。

「いただきます。」

料理の主軸はやはり洋食らしく、パン、スープ、サラダ、そしてよくわからない動物の肉だった。

「お父様、リンがお父様とミランさんとでニホンの事について話し合いたいそうです。」

「ふむ。リンよ。それはエカテリーナも行ってよいのか？」

「あっ、全然構いませんよ。寧ろ来て下さいって感じです。他にも信用出来る人なら誰が来ても大丈夫ですよ。アリスの参加もおねがいします。」

「ふむ。あいわかった。では夕食を済ませた後、話をしよう。場所や人員は我が決めよう。詳細は後で侍女に伝えておくとしよう。」

ありがとうございます。と凜がウェールズに御礼をいいその話を終わらせた時、横に座る少女が話し掛けてきた。

「リンさんでよろしくって？」

「うん、そうだよ。貴女は？」

「申し遅れましたわ。私、ウィルヘルム王国第二王女ミリエル・フランシス・ウィルヘルムと申します。お姉様とも親しいようですし、友達になってあげてもよろしくってよ。」

（うわー、ツンデレだ～。生ツンデレきたー）

カトリーナの方を見ると苦笑していた。

「じゃあ、よろしくね。ミリー。」
「み、ミリー。まぁそれでいいですわ。」
「そうそう、カトリーナ。あなたの事カティって呼んでいい。」
カトリーナは目を丸くしたが、すぐに嬉しそうに微笑み頷いた。
その後ルーナも入ってきて四人で楽しくキャイキャイやっていた。
それをウェールズ達はほほえましいそうに見ていたそうだ。

「ごちそうさまでした。」
それは何かと聞くカトリーナに、自分の国の習慣であり、食べる為に亡くなってしまった命や作ってくれた人達への感謝を込めて。と、説明するとカトリーナはもちろんウェールズに至っては唸りながら感心していた。
それを聞いた料理長をはじめとするコックさん達は、涙を流して感動したらしい。凛は全く知らなかったが。

「では、リン。また後でね。」
夕食も終わり王族と別れた凛は迎えに来てくれたアリスと一緒に部屋へ戻った。
「この後お風呂に入りますか？」
「うーん、先に調べたい事があるから後にするよ。アリス、銅と鉄

持ってない？」「銅と鉄ですか？銅は部屋にはあると思いますが、鉄は・・・。鉄は無理ですが銅を持ってきましょうか？」

「お願いしていい？」

任せてください。と言うアリスに銅を取ってきてもらう事にして、凜は考えた。

（やっぱり粗銅（そどう）なのかな？鉄はまた今度確認したらいいか）

そんな事を考えているとアリスが戻ってきた。

「これが銅です。」

アリスが持って来たのは銅で出来たコインのような物だった。

「やっぱり見ただけじゃあわからないか。アリス、通貨の事教えて欲しいんだけど」

だいたい銅貨一枚で御飯を食べられ、三枚で飯付きの宿に泊まれるぐらいらしい。銅貨十枚で銀貨、銀貨十枚で金貨になり、金貨が一枚あれば家族で一年は暮らせるらしい。

「うん、ありがと、アリス。じゃあお風呂入ろっか」

その後二人でお風呂に入り洗いっこしていると、アリスの目付きがおかしくなり、お風呂から出てきた凜がまた涙目だったらしい。

「あ～気持ち良かった。」

「また汚されたよー」

お風呂から上がった後、凜の部屋で一人はうっとりもう一人は腕で身体をだきしめてめそめそしていると、

コンコン

ガチャ

「リミスです。ウェールズ様がおよびです。一緒についてきて下さい。アリス、あなたも一緒にですよ。」

どうやら食堂で話した事を今からするようだ。

訳がわからず困惑しているアリスを連れて、リミスの後に凜はついていった。

（さてと、行きますか。）

１０話　製錬と自然の歪み

凜はリミスに連れられて国王と王妃の政務室にきていた。
政務室の中にはウェールズ、エカテリーナ、トラン、フレデリック、ルーナ、エカテリーナ、ミリエルの王族達、そして、ロザン、ロード、キングリー、ミラン、ロナード、そして一人今朝の会議では見たが名前を知らないモジャモジャした白髪の老人がいた。

「来たか、リン。この黒衣を纏った小柄な男がキングリー、密偵部隊隊長だ。そしてこの者が財務大臣フランだ。フランもキングリーもそなたの事は知っておる。安心してくれ。」

モジャモジャ白髪の御老人がフランだそうだ。

「お初お目に掛かる。私はキングリー密偵部隊隊長だ。よろしく頼む、リン殿。」

「儂はフランじゃ、フラン・アラステス。よろしくの。」

「日本凜です。ん、こっちでは凜日本です。よろしくお願いします。」

挨拶が終わった時、ウェールズが話し掛けた。

「それでリン。話とは何なんだ？」

「金属の製錬の事です。」
「金属の製錬？」

はい。と凜は応え、どのように製錬しているかを聞いた。その質問には科学官長であるミランが答えた。ミランが言うには、鉄を含む鉱物を炭と一緒に熱しまくる方法らしく、何故鉄になるかはわからないが経験で鉄が出来るのはわかっているのでその方法を採用しているらしい。銅の方も似たような感じらしい。現代人である凜は、何故そうなるか説明しないとダメか。と考えながらまた聞いてみた。

「熱する事しかしてないんですね？」

あぁ。と答えるミランの声を聞きながら考えた。

（って事は銑鉄と粗銅？）

「ロナードさん。今腰に着けている剣も見せてもらってもいいですか？」

ロナードはウェールズに確認を取り、了承を得てから凜に手渡した。

（えっ！？何これ！？）

剣を慎重に受け取り、両手で剣の柄をしっかりと握った瞬間、凜の頭の中に剣術の全てが情報として一気に流れこんできた。
その時眼も蒼く光っていたが、一瞬であったため凜はもちろん周りの人達も気付かなかった。剣を持ったままぼーっとしている凜を訝しんだカトリーナが凜に声を掛けた。

「どうかしたんですか？」

「今、剣を持った時に剣の使い方が頭の中に入ってきたの。」
凜は今しがた体験したことを語った。聞いたウェールズ達は考えたが結論は出なかった。
「すまん、リン。それは我等にもわからん。」
「・・・そうですよね。一応伝えといたので、本題に戻りますね。」
ウェールズの言葉に凜はそう返し、ロナードに尋ねた。
「剣を使っていて、もろいと感じた事はありませんか？例えば剣と剣で打ちあっている時に折れてしまったりとか。」ロナードが言うには、確かに剣自体は折れやすいが、この剣は魔法によって強化しているらしく人と戦うには問題はないらしい。相手が魔物や魔獣ならどんなに力を込めても刺さらず、切れず、逆に折れてしまうらしく、普通の武器では、無手で戦うようなものらしい。
現にアーマインの森から出てくる魔物や魔獣に騎士達は何も出来ず、魔法使いや精霊術師に頼っている。
「ふむふむ。強化魔法を掛けるのにもお金とかいるの？」
凜の言葉に黙って聞いていたミランが答えた。
「そうじゃ。第一、生物以外に強化魔法など掛ける事など出来ないんじゃ。そんな事が出来たのは、古代の魔術師団ホラドリムだけじゃ。」「ミラン様の言う通りです。だから強化された武器を買うにはかなりお金が掛かります。一般兵にまで普及してないのが現状で

す。」

「ん、それって誰が創ってるの？」

「わからないんです。」

ロナードの話では極稀にサカイで売り出されているらしく、サカイの武器商人に聞くと、赤いマントを頭まで被った男が売りにくるらしい。

凜は言及をやめ本題に入った。

「結論から言いますと、これは鉄であって鉄ではありません。銅も同様です。」

凜の言葉に全員が首をかしげた。

「この世界で鉄と呼んでいるのは銑鉄と呼ばれるもので鉄の他に炭素を３．０～４．５％も含んでいます。銅も同じで粗銅と呼ばれ銅は９８．５％しか含まれていません。」

そこで凜はミランに鉄と銅が製錬される前の鉱物を貸して下さいと頼んだ。

前持ってアリスがミランに伝えておいたのである。

凜の言葉を聞いて、ミランは赤茶色の石と黒っぽい石と金色っぽい石、三つを凜に渡した。

その時、ミランの眼がキラキラ光って見えた。と凜は後に語ったそうな。

いつの間にか、ミランさんの部下達も何故かこの場にいた。

「この赤茶色の石、黒っぽい石、金色っぽい石はそれぞれ赤鉄鉱、磁鉄鉱、黄銅鉱と呼ばれ、ご存知の通り鉄、銅の素になります。」

凜は鉄鉱石、石灰石、コークスを同時に炉に入れ還元させる方法を詳細に説明した。

「そして出来上がったのが融解された銑鉄で、こちらで武具に使われている物です。この融解された銑鉄に酸素を強く吹き込む事で銑鉄に含まれていた炭素を取り除きます。そうして出来るのが鋼と言われる物で強度、切れ味など、どれをとっても銑鉄より優れています。といっても、魔物に通用するかはわかりませんけどね。」

私の世界では鋼を使って百階くらいある建物を造ったりしてましたよ～。という凜の言葉にこの場にいた人は皆、びっくり仰天し開いた口が塞がらなかった。

「銅も不純物をたくさん含んでるけど、まだ純銅にする必要はなさそうですね。」

凜は未だに驚いた顔をしている皆を見てそう言った後、ミランの方を見た。

「ミランさ～ん！」

「あ、あぁ。何じゃ凜殿。」
呼び捨てでいいですよ。と言った後、
「銑鉄まではこちらで既に造れていますから後は冷やす前に酸素を吹き込むだけですね。あっ、今度製鉄所に見学しに行ってもいいですか？」
「あぁ、勿論じゃ。そん時はわしが直々に案内してやろう。楽しみにしておくがよい。」
凜は、鋼を知って浮かれているミランに製鉄所見学を頼んだ後、手を叩いて未だに呆然としている人達を正気に戻し、自分に注目させた。

「ここからが1番大切な話です。」
と言った後、製錬によっておこりうる酸性雨などの環境変化の諸問題について凜の世界で実際起こっている事柄を例に出し、詳細に語った。
皆、浮かれていたミランも問題がこの世界で起こった時の事を想像し、青ざめた表情をして凜の話に聴き入った。
「技術の進歩による自然の歪み。問題は常にあるという事を心に刻んでおいてください。間違えないでくださいよ、進歩を否定している訳ではないです。問題が起こった時の対策を考えて慎重に行って下さいね。」
こんなの造れるかなぁ、ってなった時にはまた連絡しますね。という凜の台詞で密会は終わった。

これ以後、ウィルヘルム王国は急激に発展していくのだが、凜の環境問題、特に酸性雨による森林の破壊の話は、アーマインの森の魔物のせいで木材不足になっているウィルヘルム王国に浸透しやすく、しっかりと受け止められた。
凜の話を後になって知ったウィルヘルム王国の民衆は、これ以上木材が採れなくなって堪るか！と、環境を守り共に生きていく事になる。
この事により以後ハルクセイド大陸では環境問題が殆ど起こらなったらしい。

１１話　一般食堂でのちょっとした騒動（前書き）

明けましておめでとうございます。この一年が皆さんにとって良い年になるようお祈りしています。

年末年始ということもあり、忙しく投稿が遅れてしまったのでお詫び申し上げます。

では今年もミカンをよろしくお願いします。

11話　一般食堂でのちょっとした騒動

「う、う～ん。ふぅ～やっぱり現実か・・・」

慣れない環境の戸惑いからか体が思っているよりも疲れていたらしく、昨晩の密会の後部屋に戻ったらすぐ寝てしまったようだ。
昨日と同じように大きな窓から入ってくる朝の日差しで目を覚ました凛は、今日は何をしようか考えた。

カトリーナ達は朝の日課である祈りを捧に女神神殿に行っているはずだ。
本当なら女神像の化身？である凛も行かなければならないのだが、重臣達の目があるからと、当分は入る事をウェールズに禁止されていた。
何もする事がなくベットの上でゴロゴロして唸っていると、ノックの音とアリスの声が聞こえた。

コンコン

「リン様、起きていらっしゃいますか？」

リンはベットから飛び降りて、ドアを開けてアリスを招き入れた。

「起きてるよ～。おはよ～アリス。」

「おはようございます。朝食のお時間なのですがいかがなさいます

か？」

もうそんな時間か。と凜は思いながらアリスに聞いてみた。

「ご飯って絶対ここで食べないといけないの？」

いいえ、そんなことはありませんが。とアリスが言ったので凜はお願いしてみた。

「食堂みたいな所ないの？あるなら行ってみたいんだけど。」

「食堂ですか？もちろんありますが・・・。」

「一応私も役人にやったんだし、色んな人と交流したほうがいいと思って。」

「そう、ですね。それくらいなら構わないでしょう。ただし、条件があります。くれぐれも御自身の正体を悟られないようにしてください、いいですか？」

アリスの言葉に、

「正体って、私は魔王か何かかっ！」

と突っ込んだ後、昨日の朝食のようにアリスに涙目でお願いし一緒に朝食をとることを了承させた凜は、そこそこ高級そうなドレスのような服に袖を通して部屋をあとにした。

（どんな所なんだろうなぁ～）

暇潰しを見つけた凜はご機嫌だった。

その日の朝、食堂への道をゆっくりと歩く茶髪の次女とその後ろをスキップするドレスを着た黒髪の少女の姿が見られたとか。

朝食をとるために凜を一般食堂へ案内しているアリスは心中穏やかではなかった。理由は一つ食堂にいるであろう人物の事である。

（う～、リン様可愛いし美しいから絶対手を出すよ、あいつ。）

そう思いながら後ろを振り返り凜を見た。よくわからない歩き方をしていたが、嬉しいらしく、それが体から滲み出ており、いつもより一層かわいらしく見えた。何度か男性の役人とすれ違ったが、皆が皆目で凜を追いすれ違った後も見ている者までいた。

（ぜったい手ぇ出すぅ～～。あぁ、どうしよ～どうしよ～。で、でもいないかもしれない。そうよ！いないかも！いるな！）

そう思っていると賑やかな場所に着いた。そこは大きな木の扉が開け放たれ、中には縦長の机がたくさんあり、人々がその周りで喋りながら何かを食べていた。そう、ここは城の中の一般食堂。城に勤めている者、その家族、はたまた王族や貴族など城に勤めている者に商売や品物を売りに来た商人まで入る事が許される場所である。

予断だが、城下にもいくつかこのような場所がある。そこは平民がよく利用し、格安な値段で食料を出している。

アリスは一般食堂の扉から1番遠い場所にある机を見た。そこには鎧を身に纏った男達が数名いた。

（い、いた〜〜！！はっ早く〜）

ほっておくと食堂の中へ突っ走っていきそうな凛の手を掴み、アリスは即座に扉の1番近くの机（鎧男達から1番離れた机）に凛を無理矢理引っ張っていった。

凛が目立つ上に、無理矢理引っ張っていったため余計に目立ったらしいが・・・。

（ふ〜。何とか気付かれずにすんだか。）

アリスはそんな事にも気付かなかったらしい。

人に見られていると気付かなかった凛は、アリスの案内のもと一般食堂にたどり着いた。そこに存在するのは人、人、人。そして漂って来る美味しそうな匂い。

凛がウキウキしているとアリスに腕を捕まれ、そのまま1番近くの席に引っ張っていかれ座らされた。

ホッとしているアリスの顔を訝しんで見た後、周りを見渡した。その時気付いたのだが食堂中にいるほとんどの人達が凛とアリスの方を見ていた。

やっぱり黒髪って珍しいんだ。と思ったが、見られているのが恥ずかしくなりアリスの方を見て話し掛けた。

「あ、アリス。なんかすっごい見られてるんだけど・・・、」

「えっ！・・・・・ひっ！」

凜に話し掛けらたアリスはしばらく周りを見渡し、ある一点を見て悲鳴のような小さい声を上げた。
訝しんでアリスが見た方を見た凜の目に、こちらに歩いて来ている鎧を纏った男達が映った。

（へ～、なかなかのイケメンじゃん）

「ようアリス！最近食堂に来てなかったじゃねぇか。最近って言っても二、三日だがな。」

集団の先頭にいたなかなかいかしてるボーイが笑いながらアリスに言った。何となく笑顔が引き攣っているような気がしたが・・・。

「う、うん。ちょっと忙しくて。」

（ん？）

言葉に詰まったアリスを訝しんだ凜はアリスの様子を伺った。
よく見てみるとアリスの頬は若干うっすらと赤みがかかっていた。
よく見ないとわからないくらいの変化を見抜いた凜はニヤリと悪い笑みを浮かべた後、

「じゃあね、アリス。私はお邪魔なようだし席を外すね。」

と宣った。アリスは凜の黒い笑みを見た後、話し掛けてきた少年を見た。
凜の黒い笑みの意味に気付いたアリスは顔を真っ赤にし、あたふたした。

「あ、あのっ、これはっ、えと。」

そんなアリスを無視して凜は少年を見た。

「はじめまして。凜といいます。すみませんが名前を伺っても？」

「あ、あぁ。これは申し訳ない。俺は王国弓騎兵隊隊長、オリバー・リングニス。アリスとは幼なじみだ。よろしく頼む。」

騎士の礼をとったあと、オリバーは凜の手をとった。

「それと出来れば今日の夜、ご一緒したいのだか、どうだろうか。黒髪の綺麗なお嬢さん。」

異性に綺麗などと言われた事のなかった凜は一瞬心拍数が跳ね上がったが、表情には出さずに手を掴んでいるオリバーの腕を抓り上げた。

「っ！」

「申し訳ありませんが今晩は無理そうです。」

そう言った後、オリバーの耳に顔を近づけた。

「アリスになんか話があるんでしょう？後ろの人達は私が連れていくから。」

「！！」

凛からそう言われたオリバーは一瞬驚いたような顔をした後、真剣な顔になり凛にしっかりとした騎士の礼をとった。
それを見た凛は、顔を赤くしてあたふたしているアリスの方に向き直った。

「じゃあ、アリス。私ご飯とって来るから。ねぇねぇ、ご飯取りに行くの手伝って（はーと）」

可愛く綺麗な黒髪の少女に声を掛けられたオリバーの後ろにいた男達は、喜んで着いていったらしい。

凛が去った後の机には一組の男女が座っていた。

「アリス。大丈夫だったか？」

「へ？何が？」

オリバーはアリスに確かめなければならない事があった。しかし、これは聴いていいことなのか？
オリバーはそう思い、数秒考えてから恐る恐る聴いた。

「侍女達が噂しているのを小耳に挟んだんだが、・・・・。カトリーナ王女様を助けた奴に、え～と、まぁ、色々されたらしいじゃな

いか。それで大丈夫だったか？」

アリスはポカンとした後、声を殺して笑った。

（で、デジャヴ？お、お腹痛い。）

「お、おい！こっちは真剣にきいてんだ！」

「くすくす。ご、ごめん。前にもこんなことあったし、本人がかわいそうで。」

「よくわからんが、かわいそうなのに笑うなよ。まぁ、その様子を見た限りじゃあ大丈夫そうだが、大丈夫か？」

「う、うん。やさしい人だったし。オリバーももう会ったよ。」（わ、私、オリバーに心配されてるよ～）

アリスは心配された事が嬉しかったが顔には出さずに、凜の事を話した。もちろん心臓は物凄い速さでリズムを刻んでいたが・・・。オリバーは勘違いしていた事がわかり恥ずかしくなったが、それ以上に凜の事が気になり、アリスに質問しまくった。

（う～。リン様の事ばかりきいて。この女好き！バカ！）

オリバーの勘が、あの少女はただ者ではない。と告げていたので質問したのだが、そんな事を知らないアリスは終始頬を膨らませていたらしい。

「それにしても、リンか・・・。不思議な奴だなぁ。俺の部下をもう懐柔するとは・・・。」

オリバーはそう呟き、御飯を貰う為に列に、鎧を纏った集団と一緒にならんでいる黒髪の少女を見た。

そんなオリバーの呟きを聞いたアリスは、そうねぇ。と返し同じようにはしゃぐ凛を見ていた。

アリスとオリバーに見られているなんて、露ほども知らない凛ははしゃぎまくっていた。

「じゃあサム君は、一ヶ月程前に入隊したんだ。」

「そうですよ。まぁ15才ですかね。この王国の騎士の中で1番若いと思いますよ。」

鎧集団の中の一人で最年少のサムワイズ・ロウンド、彼女募集中はアピールをしまくっていた。いや、サムだけではなく、全員だろう。

騎士達は基本的には異性を求めて城下町に行く事はほとんどない。出会った異性が他国の密偵かもしれないからである。よって異性と出会う事が出来るのは晩餐会などに訪れる貴族の令嬢、もしくは同じ隊の中にいる女性隊員、侍女のどちらかに自然となる。

前者は家の事などが絡む為、同性の間で牽制合戦などが行われたり、下級貴族の子供達の上級貴族の子供達に対する気後れ、そして隊長角なら呼ばれる事はあるが、一般の騎士達は晩餐会などに呼ばれない事が多い。その理由は隊長格は基本貴族出身の者がなり、平民の

出の者達は一般の騎士になるからである。
貴族の出で騎士になる者はたいてい親も騎士であり、幼い頃より英才教育を受け鍛えられているから平民の出の騎士では、勝てないのである。
オリバーという例外がいることはいるが本当にまれである。
中者の女性隊員であるが、男性隊員と比べると圧倒的に数が少なく、かなり倍率が高くなる為、勝利する者が少ないのである。
後者の侍女という線もあるにはあるが、幼なじみの騎士と結婚する事が多く、なかなか間に入り込めないのである。
ましてや役職に就いている若い女性などかなり少なく、将来も有望な為1番競争率が高いのである。
因みに凜はこれに当て嵌まる為、騎士達は必死になってアピールした。

「コイツは俺からするとまだまだですね。落ち着いて判断出来ないですから。まぁもっと経験積んで俺やオリバー隊長のようになるんだな。」

若さで攻めていたサムワイズだったが、ルークに痛い所を突かれて黙り込んだ。
ルーク・ミルガイド
オリバーの学院時代からの親友であり、よき好敵手。貴族であるが、オリバーの弓術や人柄を見て下に就く事を決めた。落ち着いた雰囲気を持つ金髪の男である。

「ルークさんは頼りになりそうですけどオリバーは・・・」

「まぁ見た目や普段の行動は変態で女好きで馬鹿な奴ですが、戦場などではとても頼りになりますよ。」

ボロクソに言われているオリバーだった。

その後、凛の主導権はルークが握り、最後には時間があれば晩餐会に招待するので来て下さい。と約束させた。

「じゃあみんな、またね！」

誰もが見惚れるような笑顔を残して凛はアリスと共に去っていった。

凛が去った後、仲間達に振り返ったルークは仲間達の顔を見て鼻で笑った。

「ふっ。」

そんなルークを他の隊員は睨み、サムワイズに至っては涙目になって睨んでいた。

そのときであった。

ゴン！

ルークは自分の頭を強烈な力で殴られ、殴った相手を見て引き攣った笑みを浮かべた。

オリバーは、ルークが大きな声で凛にオリバーの事を話していたので聞こえていたのである。

「お前、誰が女好きで馬鹿で変態だ！お前があんな事言ったせいでリンに帰る時物凄い冷たい目で見られたじゃねぇか！」

いや、全部本当の事だろ。この場にいる隊員全員が思った。
それに気付いたオリバーは黒い笑みを浮かべ、

「お前ら、今日の訓練楽しみにしとけよ。」

朝食後の弓騎兵隊練習場では屍と化した男性隊員が練習場の片隅にゴミのように転がり、女性隊員だけに手取り足取り指導している所を茶髪の侍女と黒髪の少女に見られた弓騎兵隊隊長が、数秒後には茶髪の侍女にシバかれ、他の男性隊員と同じようにゴミとなった姿とそれを物凄く冷たい目で見る黒髪の少女の姿があったとか。

１２話　真夜中の逃走と村々の視察

「はぁはぁはぁ・・・」

森の中を走り抜ける集団がいた。集団は２０名ぐらいか、皆質素な服を着ているが腰には見るからに高級そうな剣を腰に提げている。中には自分の背丈以上の大きさの剣を背負っている者もいた。

「此処までこれば何とかなるでしょう。　　様、本当にウィルヘルム王国へ向かうのですか？」

海のように青い髪を持つ青年が雪のような白髪を持つ少年に質問した。

「・・・あぁ。今はそうするしかないだろう。」

白髪の少年は少し考え答えた後、髭をはやした老人に尋ねた。

「じい、例の物は持ってきているな？」

「はい、もちろんです。」

「よし。雪の国にはあの事は伝えたか？」

「はっ！その件につきましては我が部下が彼の国の者に接触し渡したのを私が確認しました。」

少年はそれを聞き大きく頷いた後、傍にいた少女に話し掛けた。

「すまぬ、　　。こんな事になってしまって・・・」

「いいえ、　　様。私はいつまでもついていきます。」

少年と少女は愛を確かめあった後、少年は静かに、しかしこの場にいる皆に聞こえるよう力強く宣言した。

「今から我等はウィルヘルム王国へ向かう！」

そして間を少しあけ皆が注目した後

「我の力がない故にこのような事になってしまった。しかし今は落ち延びようと必ずこの国、民を奴らから取り戻す事を、今、ここ、そなた達の前で宣言する！」

見て聞いていた者達は皆、右手の握りこぶしで自分の左胸を叩きそれに応じた。

「行くぞ、皆の者！！豊饒の国へ！！！！」

集団はあっという間に東の方に消えていき、残ったのは帝都からの篝火と城からの喧騒だけだった。

「今日は何しよ～」

昨日一般食堂に行きオリバーに会い、彼がゴミになったのを見た後、アリスの案内の下城内を探索した凛は、アリスの仕事仲間、所謂(いわゆる)侍女達とその日は過ごした。
そしてまた朝を迎えたわけである。

「う～ん、何しよ～何しよ～、ふにゃ～」

昨日と同じようにベットの上でゴロゴロゴロゴロしていると、扉がノックされた。

コンコン

キツネか！と突っ込んだ後、そんなツッコミしか出来なかった自分の才能の無さに嘆きつつ返事をした。

「はい・・・。開いてますよ・・・」

物凄い暗い声になってしまった。
その声のせいか躊躇気味に開けられた扉の所にはマントを纏った少年がいた。

「あ、あの～。農務科の者なんですが・・・。」

「あっ、すいません。」（そういえば、昨夜アリスが農務科の役人が来るって言ってたっけ）

マントを纏った少年に部屋へ上がってもらった後、用件を伺った。

「フラン様からリン様の話を伺いまして、科長がすぐにでも話がしたいそうなんですが、お時間頂けるでしょうか？」

一瞬考えた凛だったが

フランさんが話したのなら悪い人ではないだろう。と判断し、了承した。

「では参りましょうか」

「えっ、今から行くの？」

部屋を出た凛は途中会った侍女にアリスへの伝言を頼み、少年と二人で農務科長がいる所へ向かった。

「ん？そういえば名前まだ聞いてなかったね。名前何ていうの？」

「あ、すみません。僕は財務省農務科のハンス・ニコルドです。」と言い、昨日のオリバーとは違う礼の仕方をした。どうやら騎士と文官では礼の仕方が違うようだ。「私は精霊・魔法科学科副官長の凛日本と言います。凛と呼んで下さいね。」

それに対し凛は、アリスに無理矢理手取り足取りで教えられた貴族の令嬢のような礼をした。

その後談笑していると目的地にあっという間に着いた。

部屋の扉をハンスがノックすると大きな声が返ってきた。声から判断すると声の主はなかなか若そうだ。

ハンスが中に入るのに続いて中に入った凜の目に映った物は色とりどりの植物だった。
部屋の本棚には本ではなく草。床にも植木鉢。窓の外には畑。
「ほぉ。お前がリンか。中々の女じゃないか。なぁ、ハンス。」
話を振られたハンスは顔を真っ赤にしていたが、幸い凜はハンスの後ろにいたため顔を見られる事はなかった。
「俺はゴート・ニコルド。名前からわかると思うがハンスの父だ。」
凜にはゴートと名乗る男がとても役人には見えなかった。肌は日に焼けて浅黒く、髭と髪が繋がっており、着ている服も泥があちこちについていた。そして服の上からでもわかるほど筋肉がついており、人というよりは熊の方が近いだろう。
呆然としていた凜だったがゴートの自己紹介で正気に戻り、こちらも自己紹介をした後、早速用件を伺った。
「リンは未開の地の果てから来たそうじゃあないか。明日、農務科が村々を回るんだか、「一緒にリンを連れていったらどうだ。」、とフラン様から言われたんだ。」
そう言ってお前も来るか？とゴートは凜に尋ねた。
凜としては暇であるため喜んで着いていきたいのだが、自分の事情もあるため、すぐに「了解」とは言えない。
「う～ん。私的には行くのは全然構わないんですけど・・・。夜まで待ってもらってもいいですか？」
全然構わない。とゴートが言ったのでその話はまた夜ということに

なり、その後アリスが夕食の時間だと伝えにくるまで、訪問する村々の事を教えてもらった。

今晩も王族の夕食にお呼ばれし、ハンスの言っていたことをウェールズに伝えると、「ハンスが一緒なら別に構わんぞ」というお言葉を頂戴した凛は、ご機嫌でハンスに「着いていく～」と報告した後、アリスと共に自室へ向かっていた。どうやらハンスは見た目どうり、かなり強いようだ。

部屋へ戻る途中、書類を持ったオリバーに会った凛は、アリスの横腹を肘でつっつきながら、オリバーに尋ねた。

「どうしたの？書類なんか持って。」

「ん？あぁ、リンか。いや、まぁ、何と言うか、また魔物が出たらしい。」

オリバーが言うにはクローという村で魔物が出たらしい。

（ん？どっかで聞いた事があるような・・・）

名前に引っ掛かった凛は確かめるためにオリバーに尋ねた。

「ねぇねぇ。クロー村って山の麓にある村？」

「おぉ、よく知ってるな。そこで人を石にする魔物が出たらしい。といっても山の中らしいけどな。」

それを聞いた凜は一瞬考えたが、気にしない事にした。

（明日行くけど山の中らしいし、何とかなるっしょ。）

オリバーに御礼を言い、アリスをそこに無理矢理残した凜は部屋に帰って明日の為にベットに潜り込んだ。

13話　ウィロー

「ねむい～」

現在馬車に乗って村々を回っている凜だったが、視察の出発が夜明け前であり、今日は夜遅くまで作業していたので寝不足である。
そんな凜の横にはハンスが苦笑しながら外を眺めている。

「それにしても、あれは凄かったな～。」

ゴートは先ほどの事を思い出し唸りながら感心していた。

夜明け前に王都であるマドリガルを出発した視察団一行は、一つ目の村、ウィローに到着した。どうやら今日と明日、二日間で三つの村を視察するそうだ。

ウィロー村。
マドリガルから真南に位置し、昔から農業により発展してきたこの村は農作物が唯一収入源だった。しかし、近年では村の中を走っていた川が干上って水が少なくなり、農作物が育たなくなった。
東に川があるのだが、川とウィローの間には谷が複数あり、そのせいで水を取りに行くのに時間が掛かり、馬車などの運送具も使えないため、少量の水しか持って来れないのだそうだ。

このようなウィローの現状を聞いた凜は、ゴートら農務科の人達と村の若者を連れて谷を見に行った。

谷は三階建てくらいの深さがあり、なによりも幅がすごかった。

「うん！何とかなりそう。」

そんな凜の声を聞いた皆は期待してどうするのかを聞いた。

「水路を造るのよ」

それを聞いた者達は落胆した。何故なら彼らもそれに何度も挑戦したからである。水道橋を造ったが丈夫な物など作れないので長くは持たず、水路を掘るなど谷があるため論外である。

それを聞いた凜は「ふっふっふ」と笑った後

「あんたよりローマの方が強いわ～」

どーんと効果音が付きそうな感じで谷に向かって指を指し叫んだ。

空気が死んだが凜は無視をして皆の方を振り返り、前もってゴートに頼んで、着いて来てもらっていた職人さん達を呼び、水を引くための物の構造を紙に書いたりしながら説明していった。

まず皮のような物で筒を造り、それを何個も繋げ水道管のような物を二本作る。

これには丈夫だが物凄く重くて使い道のなかった魔物の皮を使った。

「こんな感じでいいんですか？」

「そうね。でも絶対水が漏れないようにしてね。」
次にその内一本を村の若者に川へ取り付けに行ってもらい、その間に、もう一本を村へと持って行ってもらった。
村の若者が行っている間、凛は職人達に
「粘土で九十度に曲がった筒二個と管を三本造ってください。」
と、お願いした。もちろん焼くが、その時に出来るだけ管を平べったくしてね。というお願いもした。
職人達が作業に取り掛かっていると、村の若者達が帰って来たので、給水タンクを造ってもらう事にした。
「木で箱を造って・・・。そうそう！円形に三箇所穴開けといてね。」
タンクといっても単なる木の箱であり、注意する点は水を漏れないようにする事と中を二つに仕切る事だけなので、村の若者だけでもなんとか造れた。
「うん！なかなか様になってるよ！上出来上出来！」
タンクが出来上がると同時に粘土が出来上がったので、そこで一旦休憩をとった。
３０分の休憩の間、皆を集めタンクと管が最終的には全て繋がる事、粘土管は谷の所で使うなど説明した。
そして数人の職人達に、タンクに取り付ける蛇口の説明もした。

「よ～し、じゃあ始めよっか。」

凜のぐだぐだな号令により作業が再開され、数人の職人達は蛇口のような物を造りにいき、村の若者と残りの職人達は管と管を繋ぎにいった。

数時間後には全ての管が接続され、干上がってしまった川の跡の所にタンクを置き、タンクの穴の間所に管が接続され、残りの二つの穴には蛇口を取り付けた。蛇口は大きいのが一つ、小さいのが一つである。

「よ～し！完成！」

川の方で待機していた村の若者に合図を送る。合図を受け取った若者は緊張しながら管に付いた栓を開き、村に向かって駆け出した。

村人は固唾を飲んでタンクを見守っていた。数分経ったか、栓を開けた若者が帰ってきた時であった。

「おぉ！なんと・・・」

誰の言葉だったか。その声を始まりに皆、感嘆の声を出しタンクの近くへと集まった。

そう、水が出てきたのである。タンクの大きい方の蛇口から少しだが水が出ていた。

それを見た凜は、

「あちゃー。失敗しちゃったか。」

それを聞いた皆は水が余り出なかった事への言葉と思い、慰めよう

と思ったが次に出てきた言葉に訝しんだ。

「タンクの口を蛇口で閉めているのになぁ。やっぱり漏れちゃうかぁ。」

そう言い、タンクに近付き皆に言った。

「離れておいて下さいね。」

その言葉を怪訝に思いつつも凛の言葉通りに川の跡から離れた。
それを見た凛はにんまりと笑い。

「川よ！蘇れ～～！！！」

そう言い、タンクの蛇口を開けた。するとそこから大量の水が噴き出し大地を潤していった。

その後、村長に余裕が出来れば管を煉瓦で囲む事、そして小さい方の蛇口は家事等に水を使う為の物だ。と教え、凛は農務科の人達と共に去っていった。

村の者達は谷から水が、しかも大量に上がって来た事が信じられず呆然としていた。
そして誰かが呟いた、奇跡だと。

この一連の出来事は後に【ウィローの奇跡】と呼ばれ、年に一度この日を祝う祭が行われるようになった。

余談だがこれ以降、凜はウィローの村人から【ウィローのローマ】と呼ばれるようになり、それを知った凜は村へ行き「それは町の名前だっ！」と突っ込んだらしい。
どうやらあの叫びのインパクトが強すぎ、凜＝ローマとなったようだ。

「次の村はどんなトコでしたっけ？」

「覚えてねぇのかよ。タンデムっつってな、豆の生産で生活している村だ。その次はクローだな。」

「ねぇ、タンデム村の事なんだけど、『水がありません、隊長！』とか『バイクはやっぱり二人乗りだぜ～！』とかないですよね？」

「・・・・。よく意味がわからんが水がない事はないだろう。それに敬語とタメ口を混ぜるな。タメ口でいい。」

「へぇ～。タメ口って言葉あるんだ。」

「ないけど、お前が使ってたんだろうが・・・。もういいさっさと寝てろ！」

「・・・襲わないでよ。」

「そんな事はハンスに言え！」いきなり名前が挙がったハンスであったが寝たふりをして危機を乗り切った。

「ん？ハンス君？なんでハンス君なの？」

そして数時間後、凜達は次の村、タンデムへ到着するのであった。

―――――――――――――――

【注意】

ここに書かれていた事はそんなに簡単に出来る物ではありません。一日で出来上がるなど有り得ないでしょう。記憶が曖昧なため、水路などおかしい部分がたくさんありますし、根本的な所から間違えている可能性もあります。

完成したのは物語だからという事にしておいて下さい。

ご存知の方がいれば教えてくださるとうれしいです。

感想などは随時受け付けています。

Ｍｒ．ミカン

―――――――――――――――

１４話　タンデムと真夜中の逃走２

昨夜ウィローを発った凜達、視察団一行は夜明け前に次の村、タンデムに到着した。

「う～ん。空気がおいし～」

タンデム村
マドリガルの真東に位置し収入源は豆などやはり農作物である。
近くに川と池があり、森もあるにはあるが森という規模ではなく、どちらかというと林に近く、中も明るく魔物も出没した事がない。

視察団一行はタンデ％村長が言うには、何か新しい特産物が欲しいらしい。

「昔は豆を作っているのは少なく、この辺ではタンデム村だけだったのですが、最近ではどこの村でも栽培され、豆の値段が下がり暮らしていけない家も出てきているのです。」

凜は、豆は栄養価が高いですからねぇ。と言いつつ、前々から気になっていた事を聞いてみた。

「ゴートさん。染料とかってどうなってるの？」

聞かれたゴートは少し考えた後、答えた。

「染料は植物からだ。根や花を使って染める。」

「ふ～ん。だから布地に絵や模様を書く時、刺繍だったり、布を貼ったりしてたんだね。」

どうやらハルクセイド大陸では動物から染料を採ったりしていないようだ。

凛は少し考えた後、近くの池や川に貝がいるか尋ねた。

「貝、ですか。もちろんいますが、どうなさるおつもりで？」

まずは見てからと、村長など村人数人とゴートら農務科の人達を連れて、川と池を調べに行った。

「なぁ、リン。貝なんかで何をするつもりなんだ？たぶん食べれないぞ。」

凛の行動を訝しんだゴートは凛に尋ねた。

「くすくす。別に食べないよ。さっき染料は植物からしか採らないっていったでしょ」

「あぁ。」

「私の所では貝も染料に使っているの。」

「はぁ！貝だって！貝のどこを染料に使うんだよ。殻か？煮ても焼いても色なんて着いた事ないぜ！」

「煮たり焼いたりしないよ。私の国では貝が持つパープル腺って言うのを使っているの。パープル腺は貝の黄緑色の内臓の事ね。それの中身を布に擦りつけ、酸素と紫外線にさらすと黄緑色から紫色に

変化するの。パープルっていうのは紫という意味でね、その文字の通り紫色の染料が採れるの。ん？『採る』っていうのとは違うか。」

まぁ、後は行ってからのお楽しみ！と言い凜は話を終わらせた。

川と池を調べた凜はガッツポーズをした後、貝を数個村長宅へ持って帰った。

「これの黄緑色なのがパープル腺といって染料になります。」

凜は貝殻を少し剥がしパープル腺を見せた後、パープル腺を取り出し中身を黄緑色をした布に擦り付けた。

「ん？色が付いてないですが。」

見ていた村長がそう言ったのを聞き、凜はニヤリと笑った後、外へ出ていった。

「？」

村長や村人達や農務科の人達は首を傾げた後、凜に付いて出ていった。

「見ていて下さいね。」

そう言い、凜は染料が付いた布を太陽にさらした。

「ほぉ」

すると黄緑色の布に鮮やかな紫色の模様が浮かび上がった。

「ちなみに私の所ではこの染色の事をカイムラサキと呼んでいます。」

「す、すごい。あ、ありがとうございます。リン様。」

様は止めてね。と、凜は言った後、『乱獲はしない事。どうしてもたくさん欲しい時は時間を掛けて養殖すること』等を約束させた。村人は、絶滅するとまた生活が困窮するので快く了承した。

農務科の人達は昨日と今日、報告書を書くのに忙しかったが、知らない事を知れ、知識が増えたので充実した日を過ごせていた。

「お前はいったい何者なんだ？」

報告書を書き終えたゴートは凜に話し掛け、それを聞いた凜は、

「凜日本。女子高生、そして精霊魔法科学副官長。それ以上でもそれ以下でもないよ～。」

こうしてタンデムでも活躍したのだった。

「じゃあ、またいつか来ますね～」

「「「ありがとうございました！また来て下さい！」」」

凜達、視察団一行は村人全員に見送られクロー村へと向かっていっ

た。

「門の所を見てください、　　様。かなりの兵が駐屯しています。四百名余りのようですが、いかがなさいますか？」

「決まっているだろう。あれを越えねば行けんのだからな」

暗闇の中で白髪の少年と青髪の青年が話をしていた。彼等の目線の先には城壁と門そして多数の兵がいた。

「　　、術を頼む。」

「はい。」

彼等、二人の後ろには２０名余りがいて、全員質素な服を着ていた。少年は傍にいた少女に頼んだ。

「精霊よ。彼の者達に風を・・・＞ヴィント＜。我が意志に従い眠りを誘い地に伏せよ・・・。＞シュラーフ＜」

少女がそう言った瞬間、門の所にいた兵士達の半数が地に伏せた。それを見た白髪の少年は腰の剣を抜き放ち、門目掛けて駆けていった。後には彼の部下が続いた。

「行くぞ！突破せよ！！！」

「敵襲ー！賊だ！迎え撃て！弓部隊、前へ！」

襲撃に気付いた兵士達は迅速に陣形を組み、弓部隊を前に出し一斉掃射をしようとしたが、襲撃者の方から何かが飛んできて弓を破壊していった。

「っ！魔法使いだ！気をつけろ！」

「なんだこいつら！精霊術士もいるぞ！」

「いや、魔術士もだ！こいつらホントに賊か！」

精霊術のおかげで物凄い早さになった襲撃者達は、兵士達に接近し次々と地に捩伏せていった。

数分後、残ったのは地に伏せた鎧を纏った兵士達だけであった。

15話　クローの魔物

「はぁはぁ・・・」

クロー村
マドリガルから北東より少し南よりにある山、リーゴン火山の山間部にあり、人口は五十人余りの小さな村である。雨にも恵まれ村の近くを通る川も干上がる事なく、毎年安定した収穫が得られている。

「はぁはぁ・・・」

しかし、山の中にあり王国の端に位置するので、修業している人以外は行く事がない村である。

「はぁはぁ・・・。何が麓よ。山の中じゃない。」

タンデム村を出た視察団一行は、クロー村を目指していた。が、途中馬車の車輪が壊れてしまい数人を馬車に残して、歩いて山を登っているのである。

「ほら、見えてきたぞ。」

集団の先頭にいたゴートが、皆に言った。
ゴートの言うように木で作られた冊のような物が山の岩の間から見えていた。

「う～ん。何と言うか・・・。」

村に入った一行は、村の異常さに困惑した。昼にも関わらず外に人が一人もいなかったのである。

「静かと言うより寂れてるね。空気がなんか重いし。いつもこんな感じなの？」

「いや、もう少しマシだ。というかなんか変だ。」

凜は違和感を覚え、ゴートに聞いてみたが、ゴートもそれを感じ取ったが詳しくわからないようだ。

違和感を感じつつも村長の家の前まできて、扉をノックした。

「ウィルヘルム王国財務省農務科の者だ。村長と話をしたいのだが、誰かいるか？」

少しの間の後、扉が少し開き、外の様子をの様子を伺った。

そして閉まったかと思ったら物凄い勢いで扉が開き、中から小柄な老人が文字通り飛び出てきた。そしてその勢いのままゴートに飛び付いた。

「ご、ゴート様！私達を助けて下さい！」

ゴートは老人を落ち着かせ、未だ呆然としている凜達を正気に戻し、老人に話を伺った。

「どうしたんだ、村長？何があったか教えてくれ」

どうやらこの老人がクロー村の村長のようだ。

村長曰、人を石にする魔物が村の付近に出没し、討伐しに行った村の男達十五名が帰って来ないらしい。
村長は止めたそうだが、男達は聞かずに勝手に行ったらしい、ひのきの棒を持って・・・・。

（うわ～、ツッコミたい！ツッコミたいけど後ろめたさがある！）
そう凜はこの事を知っていた。二日前、出発する前夜、オリバーから聞いていたのである。

「勇者か～！」

が、欲には勝てず突っ込んだ。しかし真面目な話をしていたため全員に無視された。

（・・・・）

「何だと！？この山の中に魔物だと！小型の魔物か？」

リーゴン山があるアパデス山脈は岩などが入り組んだ迷路のようになっていて、道も細く魔物が今まで出没した事がなかったのだ。

「初めに発見した者の話では小型というより人型のようです。」

「人型？それは本当に魔物なのか？」

「そ、それは・・・」

話し合っているのを他所に凜は考えていた。

（人を石にする・・・。人型・・・。っ！まさか！！）

「ねぇ、村長さん。第一発見者の人をここに連れて来てくれませんか？」

いきなり話し掛けられた村長は怪訝な顔をしてゴートの顔を見たが、ゴートが頷いているのを見て若い者に呼びに行かせた。

「ゴート様、こちらの少女は？」

「ん？あぁ、紹介してなかったな。魔法・精霊科学副官長殿だ。」

紹介された凛は

「凛日本です。よろしくお願いします。」

と言い軽くお辞儀をした。それを聞いた村長は驚き、目を見開いた。

「この少女が！？いや～、噂はかねがね聞いております。もっと、ごつい方だと思っておったのだが、本当に麗しい綺麗な方じゃ。その年で役職につくとは・・・。」

褒めちぎられた凛は顔を赤くして俯いていたが、次の村長の言葉で顔を上げた。

「【ウィローのローマ】も貴女の事じゃろ？神秘的な響きがある！」

それは町じゃ～！とツッコミ、わいわいやっていると、呼びに行かされた若者が少年を後ろに従えてもどってきた。

「その魔物、本当に魔物だったの？人じゃなかった？例えば女性とか・・・」

凜に尋ねられた少年はビクリと肩を震わせた後、ぽつりぽつりと語りだした。

「はい、女性でした。」

それを聞いた面々は息を飲んだが、凜は気にせずに先を促した。

「その日、山を少し登った所でその女性が檻に入れられて眠っているのを見たんです。近付こうと思ったんだけど、赤いマントを着た人と痩せている男がいて、怖くて近付けなかった。そしたら赤いマントを着た人が女性を起こして、その女性が痩せている男を見たらその男が石になったんです。怖くなったから逃げようと思って振り返ったらさっきのマントの人がいて、それで、「魔物が出たと言え！言わなかったら村を潰す」って言われて・・・。」

凜は少し考えた後、呟いた。

「メドゥサみたいね・・・」

「めどぅさ？」

その呟きを聞いたハンスはそう言い、ゴートは、なんじゃそりゃ？と言った。

「石化、人型それも女性、そのキーワードから導き出されるのはメドゥサしか知らないわ。でもメドゥサなら頭髪が蛇なんだけどねぇ」

凜はそう言い、俯いき。聞いたゴートが凜に話し掛けた。

「それでメドゥサってのはなんなんだ？」

「ん？あぁ、メドゥサはね、神話の中に登場するの」

「神話！？」

えぇ、と言い語りだした。

「ギリシア神話っていってね昔の伝説とかを集めたものよ。そこに出てくるの。私の記憶が正しければ、メドゥサはゴルゴン三姉妹の一人よ。蛇の頭髪を持ち、見る者を石と化したそうよ。でもペルセウスに退治され、その頭はアテナに贈られたと言われているわ。」

それを聞いたハンスが聞いた。

「ペルセウスって誰ですか？アテナも」

「え～と、アテナはギリシア神界最大の女神よ。大神ゼウスの頭から生まれたといわれ、学問・技芸・知恵・戦争を司っているわ。ペルセウスはギリシア神話の英雄でゼウスとダナエとの子供よ。エチオピアのアンドロメダ王女を怪物の手から救って妻にしたみたい。でも、後に誤って祖父を殺してしまったから、生地アルゴスを去ってティリンスを支配したそうよ。」

やっぱり女の子の夢は英雄よね～。私も助けてもらいたいわ。と、凜がうっとりと言っているのを見たハンスは、強くなろうと心の中

で誓うのだった。

「おい、凜戻ってこい。」

その後、もう夜も更けてしまうので、帰るのが一日遅れるが、今日ここに泊まろう。ということになった。

村長宅の部屋をかりた凜は、ベットに寝転びながら考えた。

（メドゥサか・・・。違うとは思うけど、どうすればいいんだろ。やっぱり退治しないといけないのかな？それに檻に入れられていたみたいだし・・・。後はマントね。はぁ、明日は忙しくなりそう。）

16話　魔眼の女

「――――さい」

「んぁ？」

「――――なさい」

昨日の昼過ぎにクロー村に入った凜は、借りた村長宅の部屋で寝ていると不思議な声が聞こえてきて起きた。
窓から月の光が差し込んできているので夜中のようだ。

（ん？なんか聞こえたような気が・・・）

しかし、何も聞こえてこず、もう一度寝ようと凜がベットに潜り込んだ時

「―めんなさい」

「っ！！」

再び声が聞こえたきて凜は文字通り跳び上がって驚いた。

（な、何今の？お、お化けさんとかじゃぁないよね）

「――んなさい」

よ～く耳を澄ましてみると声の主はどうやら女性のようだ。

（な、何この声。女性って・・・、っ！ま、まさか井戸の中から『一ま～い、二ま～い』とか、死装束を着た女の人が這って出てくるとか、な、ないよね）

「―めんなさい」

聞いていたが声がしなくなる様子はなかった

「―めんなさい」

「よ、よし！き、気合いよ、凛！気合いで眠るのよ！何も聞こえな～い、何も聞こえな～い」

凛は気合いで寝ようとベットに潜り込んだ。

「―めんなさい」

「・・・」

「―めんなさい」

「・・・・」

「―めんなさい」

「・・・・・」

「―めんなさい」

「・・・・・・・」

「―め「寝れるか～～！！」んなさい」

その夜、部屋の中で身嗜みを正す時、鏡に映った自分の背後に誰も映ってないか確認したり、山の中に行く途中にある井戸をわざわざ迂回している黒髪の少女の姿が見られたとか。

その後気合いで寝ようとした凜だったが

「助けて」、と声が聞こえたので静かに部屋を出て、声のする方向かっていた。

「ごめんなさい」

部屋を出て３０分程歩いたら、回りを岩に囲まれた広場のような場所にたどり着き、声はその場所から聞こえており、声の主は何かに謝っているようだ。

「ごめんなさい」

（そ～っとよ、そ～っと）

凜は自分に言い聞かせているようにそっと広場の中を伺った。

「っ！」

そこには女性がいた。周りに男達をを侍らせて。

（ん？なんか・・・）

違和感に気付いた凜はよ～く目を凝らして男達を見た。

「っ！！」

男達は石で出来ていた、いや、石にされたのかもしれない。全員が怯えた顔のまま固まり、ひのきの棒を持っていた。

（っ！あれって退治に行った村の人達だよね）

凜が様子を伺っていると女性が

「ごめんなさい・・・。何で私がこんな目に・・・。誰か助けて・・・」

女性の声には深い深い悲しみと絶望が込められていた。

それを聞いていた凜はいたたまれなくなり、意を決したように声を掛けた。

「あの～」

「っ！」

凜の声を聞いた女性は、直ぐさま凜とは逆の方向を見た。

「な、何？こんな夜中に外へ出てはダメよ。早く家に帰りない」

「・・・その男の人達を石にしたのは貴女ですか？」
それを聞いた女性は肩をびくりと震わせたが、少しの沈黙の後
「・・・・そうよ、私がしたわ。早く家に帰らないとあなたも石にしちゃうわよ」
女性はおどけたように言ったが、その声は震えていた。
凜は女性の言葉を聞き、この女性が悪い人ではないと判断した。
「・・・どうして、今、ここで石にしないのですか？」
凜にそう聞かれた女性は、肩を震わしながらぽつりぽつりと自分の心の中を語りだした。
「・・・もう、嫌なの。何の罪もない人を石にして殺して・・・。一人でここにいて、誰か来てくれたと思っても、私と目を合わしただけで石に・・・。何で私がこんな目に。うぅ。誰か助けてよ・・・。っ！」
凜は、泣き出してしまった女性の背後にいつの間にか移動し、そっと後ろから抱きしめた。そして優しい声で話し掛けた。
「大丈夫。私は貴女の傍にいるよ。」
「は、離れて！これ以上人を危めたくない！お、おねがい・・・」
抱きしめられた事に激しく抵抗していたが、徐々に弱くなっていき、凜の腕の中で眠ってしまった。
凜は優しく微笑んだ後、真剣な顔になり女性の顔を覗き込んだ。

「っ！！」

女性は綺麗な顔をしていたが、一カ所だけ不自然な所があった。
右目の瞼が赤黒く変色し、目を中心に緑色の血管が数本浮き出ていて、時折その血管が脈動していた。

（ん？なんかあったかい・・・。何だろ？でもすっごく安心する）

女性は日が高く昇る頃、異常なあたたかさを感じて目を覚ました。

「っ！？」

女性が目を覚まして初めに目に入ってきたのは、少女だった。
その少女は黒髪でとても整った顔立ちをしていた。

（女神みたい・・・）

少女の黒髪に日の光が当たってキラキラと光り、容姿と相俟って神秘的な雰囲気を醸し出していた。うっとりと少女の顔を見ていた女性は、自分が少女の腕の中で眠っていた事に気付いた。

「！！！」

女性は今の状況に驚き、少女を突き放した。

「あっ！」

気付いた時には既に遅く、少女、凜は起きた。

「ん？」

起きた凜の視線と驚き固まったままの女性の視線がぶつかり合った。

「な、何で石にならないの？」

「ん～。わかんない」

何故、石化しなかったかは凜にもわからなかったが、自分が石にならないという自信は何故かあった。

「でも一つだけわかった事があるわ」

「？」

「それはね、『私が貴女の傍にいても大丈夫』、という事だよ」

「っ！」凜にそう言われた女性は昨夜と同じように泣き出したが、その声、その表情には悲しみや絶望がなく、嬉しそうな綺麗な泣き顔だった。

「ありがとう！ありがとう！

「うん！」

女性が泣き止むまで待った凜は、女性が泣き止むと優雅に自分の名

前を名乗り、女性の名前を聞いた。

「私、凛日本いいます。一応ウィルヘルム王国精霊・魔法科学副官長です。よろしくね。」

「私は・・・私の名前はありません・・・」

女性はそう言い、自分の生まれを語りだした。女性の話は暗く悲しく、聞いていた凛は泣きそうになった。
女性は物心が着いた時から薄暗い地下牢のような場所で実験台にされてきたらしい。
毎日毎日、身体に呪文を描かれたり、魔物の一部を身体に埋め込まれたりしていたそうだ。それを聞いた凛は女性の右目を見た。やはり昨晩見たように変色し、血管が浮き出ていた。
凛が右目を見ている事に気付いた女性は悲しそうに笑い、頷いた。

「そうよ。この右目もそう。後は全部失敗になったけど、背中に石像のような魔物の翼を付けられたりもしたわ。」

そう言い自分の右目を押さえた。

「この目の魔物は見た者を石にした蜥蜴のような生き物だったわ」

(ガーゴイル、バジリスク・・・。地球では伝説の生き物が魔物となってる・・・。他にもいるのかな)

「ねぇ・・・」凛が考えていると女性が俯いたまま話し掛けてきた。

「これから私、どうしたらいいのかな・・・。この人達も元に戻らないし・・・」

そう言って、女性は退治にしにきた村の男達を見た。

（たいてい場合、こういうのは術者が倒されたら元に戻るけど、そんな事は絶対に出来ないし）

凜が考えていると

「私、星が好きなんだ。」

「えっ？」

「私、星が好きなの。ここに来た人を石にして心が沈んでいた時、いつも星を見ていたの。」

女性はそう言い、空を見上げた。今は昼なので勿論星など見えないが。

「星を見ていると、自分の悲しみとか絶望とか、そういうのが、とてもちっぽけな者に見えて、明日も頑張って生きよう、って思えてくるの」

そう言い女性は凜の方を見て綺麗に微笑んだ。それを見た凜も自然と笑顔になった。

「名前」

「えっ？」

「貴女の名前、私が付けていい？」

「！！」

凜にそう言われた女性は驚いたような表情をした後、泣きながら、しかし嬉しそうに笑いながら頷いた。

「うん！」

「【星（シュテルン）】。貴女の名前は【星（シュテルン）】」

１７話　女神の使者（前書き）

こんにちは。
何か思ったこと、感想など書いて下さると嬉しいです。
これからも『ミカン』と『女神の使者』をよろしくお願いします。

Ｍｒ．ミカン

17話　女神の使者

「はぁはぁはぁ・・・」

「はぁはぁ、着い、たか・・・はぁ」

白髪の少年が目的地にたどり着いた。彼の後ろには追手を共に退けてきた彼の最も信頼出来る部下達もいた。

「マドリガル。王の城だ。」

そう言い、少年は白亜の城壁に幾重にも囲まれた純白の城を見た。

「様！ただいま戻りました！」

「ふむ。してどうだった？」

少年はマドリガルに潜伏していた密偵に状況を聞いた。

「それが、少しではありますが活気を取り戻しているようです」

「それは誠か？」

「はい。それに良質の武器まで出ています。」

「良質の武器だと？」

尋ねられた密偵は、強化の魔法を施された剣と打ち合える程の剣が、少しではあるが出回っていると伝えた。

（新しい製錬方が発見された・・・か？）

少年は少し考えた後、号令を出し、王都へと向かった。

「シュティの事、村の人達に話してあげる。」凜が女性、シュテルンに名前を付けた後、今後の事を話し合っていた。

「で、でも私にはこの眼が・・・」

「大丈夫だって。さっき実験したんだから。」

実験とは、凜はおいといて、どうなれば石になるかをその辺にいる虫さんで調べたのだ。虫さん、ごめんなさい。色々調べてみた結果、相手の目がシュテルンの右目を見たら石になる事がわかった。

「だからこの布で右目を隠したら大丈夫だって」

そう言い、凜は自分の服の袖から破り取った布をシュテルンの右目が隠れるよう、眼帯のように巻き付けた。

「うん！カッコイイ！シュティ、綺麗だから似合ってるよ」

もともと顔立ちが整っているので眼帯を付けても違和感はなく、寧ろ凜々しくなっていた。

「ほ、ホント？」

が、シュテルンには自信がないようだ。

「ホントだって！男の人、皆惚れちゃうかもね」

女同士でキャイキャイやっていると、この広場の入口が何やら騒がしくなってきた。

それを感じ取ったシュテルンは凜の背中に隠れ、凜は入口を睨み付けた。

少し前・・・

朝起きたゴートは顔を洗い、朝食をとっていた。その場には村長、村長の家族、昨日ここに泊めてもらった視察団などがいた。

「おい、ハンス。」

「何？父さん」

「凜をそろそろ起こしてこい。」

「え、な、なんで僕なの？」「お前、あいつに気があるだろ？」

ゴートは息子ハンスにニヤニヤして言った。

「っ！」

それを聞いたハンスは顔を赤くして口をパクパクした。

「ほぉ～、そうでしたか。いや～残念、わしの息子の嫁にでもと思ったのですが、先約がいましたか」

それを見た村長が悪ノリして、そう言った。

「な、なんで、そうなるんですか！？」

ハンスはそう言ったが

「ん？違うのか？」

「ち、違うよ・・・」

「そうですか！ではわしの息子の嫁に「ダメです！」しよう」

「何故、ダメなんだ？」

グチグチ言うハンスにゴートはそう言い、言われたハンスは明らかに動揺して視線を泳がせた後、『いい案が思いついた』と言わんばかりにゴートに言った。

「そ、そういう事は本人、リン様が決める事です！僕たちが口出ししていい事ではありません」

と言い、『もう何も聞くな』と言わんばかりに黙々と朝食をとり始めた。

「ちっ、正論を言いやがって。今日の所はこれくらいにしといてや

るよ」

「それにしても本当に遅いですなぁ」

「あぁ。ハンス、冗談はなしでホントに起こしてこい。」

「・・・わかったよ」

少し間を空けてからハンスが頷いて、部屋を出ていった。
いやいやと言いながらも凜の部屋へと行く時、スキップしていた。
数分後、ハンスが顔を真っ青にして慌ただしく戻ってきた。

「父さん！た、大変だ！リン様が！」

ハンスの様子にただ事ではないと感じたゴートは席を立ち、何があったか聞いた。

「り、リン様が、リン様が部屋にいない！」

「「「は？」」」

その場にいた皆がそう言った。

「ハンス！落ち着いて話せ。」

ゴートの声に落ち着きを取り戻したハンスは先ほどの事を話した。

「と、父さんにリンを起こしてこいと、言われてリン様の寝室に行ったんだけど、声を掛けても返ってこなかったから、中に入ってみ

たら、寝室にリン様がいなくて。」

「あのお転婆娘め！ハンス！もう一度リン　の部屋に行くぞ。何か遺っているかもしれないからな」

「はい！」

「村長は、申し訳ないが黒髪の少女を見た者がいないか、村の人達に聞いてきてくれ」

「任されよ」

凜の寝室に着いたゴート達は、不自然なところがないか調べた。

「父さん、リン様の服がないよ」

「・・・そのかわり、寝間着はあるな。」

「って事は着替えて外に行ったのかな？」

「それしかないだろ。いつ着替えたか、だな」

その後も調べたが、それ以上の事はわからなかった。

「これ以上はわからんか・・・」

「ゴート様！有力な情報を得ましたぞ」

手詰まりになったところで、村長が部屋の中に駆け込んできた。

「夜中に井戸の水汲みをしていた者が見たそうじゃ。『黒髪の少女が何故か井戸を避けて山へ向かった』と言ってましたぞ。」

「・・・何故、井戸を避けたかは、わからんが黒髪からしてそいつがリンだろう。でもなんで山の中に・・・」

ゴートはわからなかったが、ハンスは何か思いあたる節があるようで顔が真っ青になった。それを見たゴートが怪訝そうにきいた。

「どうした、ハンス？何かわかったのか？」

「や、山の中に魔物がいるから、退治しようとして、は、入ったのかも」

ゴートは少し考えた後、村長が言うのを遮って言った。

「そんな訳「いや、ありえる」・・・」

「しかし、女子（おなご）、一人で、魔物が出没している山へ行くかのぉ」

村長はそう言ったが、ゴートはすぐに否定した。

「いや、十分ありえる。村長は知らんが、リンは【未開の地】の果てから来たらしい。だから魔物の対象方法を、何かしら持っていたのかもしれない」

『フラン様は、リンの事に関して、何かまだ隠しているようだったけどな』と言い、村長に山の中に行く事を伝えた。

「それならば、魔物の事もありますし、山に詳しいわし（村長）と、村の者も数人着いていきます。」

「あぁ。頼む」

と言った後、ゴートが部屋を出ていき、その後をハンスと村長も着いていった。

そして山の中を駆け回ること一時間、岩によって回りを囲まれた広場のような場所にやってきていた。

「ん？父さん。声が聞こえるよ」

「あぁ、女だな。それも二人で、一人はよく知る者の声だな」

そう言い、ゴートは広場に入っていった。

凜が睨み付けていた入口から入ってきたのは熊のような男、ゴートだった。

「あれ？ゴートさん？」

「あれ？じゃねぇ！何やってんだお前は」

「それにハンス君と村長さんも。あっ、村の人達もいるじゃん」

「朝起きたら、お前がいなくなってたから探しに来たんだよ。ったく、心配かけさせんな」

と言い、ゴートは凜の頭をペシッと叩いた。『いた～い』と言う凜を無視して凜の後ろにいた女を見た。

「で、リン。誰だこいつ？」

凜は『あぁ』と言い説明しようとしたが絶叫によって遮られた。

「その人はね、シュテ「お、おい！！大丈夫か！！！しっかりしろ！」」

着いてきていた村人達が、石にされた村人達を見つけたのだった。

凜は数十分掛けて、シュテルンの事情を話した。初め、『シュテルンが村の人達を石にした』と、凜が話した時、村の人達は怒り、敵意をもってシュテルンを見ていたが、生い立ちなどを話したらシュテルンに同情し、その怒りをマントの男に向けていた。

「・・・と、いうことなんです。」

説明を終えた凜はゴートに尋ねた。

「ゴートさん。シュティはこれからどうなるんですか？」

それに対しゴートは少し考えた後、答えた。

「今は何とも言えんが、村人に危害を加えたという事実は消えない。何かしら罰を受けなければならないだろう」

「っ！な、なんで！？ねぇ、シュティは今まで罰を受けてきたんだよ！なんでまた受けなきゃダメなの！？」

それを聞いた凜は激怒したが、シュテルンによって止められた。

「いいのよ、リン。そう思ってくれる人がいるだけで私は幸せよ。」

『でも！！』と言う凜に、『ありがとう』と言い、シュテルンはゴートの前に出た。

そして、両手を前にだした。

ゴートは辛そうな顔をしながら腰に付けていた手錠のような物を手にとり、シュテルンの前に一歩踏み出した。そしてシュテルンの腕に手錠をはめようとした時、

「そんなにも罰を受けたいなら俺が下してやる！！」

グサッ

どこからか声が聞こえ、凜の目の前を赤い何かが通り過ぎていき、シュテルンの腹部に付き刺さった。

そそれは血のように赤い剣だった。

「っ！シュティ！！！」

凜は倒れそうになるシュテルンの肩を抱き、ゴート達は剣が飛んできた方を見た。

そこにはマントを纏った者がいた。顔はマントに隠れ見えないが、先程の声から判断すると男のようだ。

ゴートは腰に提げた剣を抜き放ち、凜達を守るように一歩前にでた。後ろでは村人達が同じように腰から抜き放った。ひのきの棒を・・・。

「貴様、何者だ！！」

ゴートは声を張り上げて威嚇したが、男はおどけるように言った。

「おー、こわいこわい。そう怒りなさんな。別に俺はあんた達にちょっかい出しにきたわけじゃぁねぇ～よ」

『俺のペットの後始末をしにきただけだ』と言い、凜の腕の中で苦しんでいるシュテルンを見た。その目は笑っており、狂っていた。

「はははは！俺の用事はすんだから帰らせてもらうぜ『発送（アプ・ゼンドゥング）』」

男がそう言うと、シュテルンに突き刺さっていた剣が消え、男の手に戻っていた。

「じゃあな」

黒い霧のような物が男を覆い、霧が晴れた後、男は消えていた。

「シュティ！！！」

凜はシュテルンの腹部を手で押さえ、必死に血を止めようとしたが血は凜の手の隙間から流れ出た。

（な、何か手はないの、何か手は・・・）

「り、リン・・・。もう、い、いわ。」

「よくない！！！シュティ、私が絶対に助けるから！」

そう言い、凜は自分の、先程シュテルンの眼帯のために破り取ったのとは逆の方の、服の袖を破り取り、シュテルンの腹部に押さえつけた。

それを見ていたゴートは悲しそうな顔をして、

「リン。諦めろ・・・。治癒術も効かなかったんだ。治りはしない」

治癒術を使える者が術をかけたが、あの剣には魔法無効の術がかけられていたようで効かなかった。

「そんな事ないもん！絶対に助けるだからぁ！！」

懸命に血を止めようとしたが止まらず、シュテルンと凜の回りは血溜まりができた。

「り、リン・・・。あ、りがと、う・・・」

そう言い、シュテルンは目を閉じた。

「シュティ！シュティ！いやぁぁぁぁぁぁ！！」

凜は絶叫し、涙を流しシュテルンに縋り付きながら意識を失った。

凜が泣き疲れたからなのか、ショックからかはわからないが、意識を失った。

ゴートは今だ石のままである村人達を見た。

「村長。まずは石になったままの村人達を村へ運ぼう」

「了解じゃ」

そう指示を出した後、ゴートは凜を連れて帰るため、凜の方を振り返った。

「なっ！？」

凜は泣いていた。いや、姿は凜だが、凜ではないのかもしれない。ゴートの声を聞き、村人を運ぼうとしていた人達が、ゴートが見ている方を見た。

「「「「っ！！？？」」」」

皆が見たのは、翼を持った凜だった。翼といっても鳥のようにしっかりとした物ではなく、透明度が高く、ぼんやりと、青白く光っていた。

凜は泣いていた。目から光り輝く宝石のような涙が零れ落ち、その涙が地に溜まったシュテルンの血と混じり合った。

『幻の白翼騎（イリュズオオン・エル・シュヴァル）』

澄んだ、とても綺麗な声だった。
凜がそう呟くとシュテルンの血が淡く光り、動きだし、何かを象(かたど)っていった。
皆、呆然として凜、そして『血』をを見ていた。
シュテルンの血は何か生き物のような形になり、物凄い光を出し始めた。
ゴート達は腕で目を覆い、光が納まると驚きで目を見開いた。
純白の翼を持つ馬が凜に頬を撫でられ、嬉しそうに嘶(いなな)いていた。

「たまげた・・・。何だこりゃ」

ゴートはそう呟き、凜と馬を眺めていた。

馬の頬を撫でていた凜は、突然石になったままの村人達の方へ向かって歩きだした。
石の村人の前に着いた凜は、手を村人の額に添え、呟いた。

『完全(パルフェ)なる回復(レタブリスマン)』

石になったままの村人を中心に、閃光が辺りを照らした。光が納まると、石化が解けた村人達が地面に寝転んでいた。

「女神だ・・・」

それを見ていた誰かが呟いた。それを聞いた凜は、優しい笑みを浮かべた。

『この子は女神ではありません。【私の使い】、そして【希望】ですから』

そう言い、ゴートに向き直った。

『一連の出来事を貴方の王様に報告してください』

では。と言い、凜に生えていた翼が消え、それと同時に凜は崩れ落ちた。

「よっと！」

崩れ落ちる凜を抱き抱えたゴートは、村人に指示を出し始めた。

「お前も来るか？」

ゴートは翼を持つ馬に話し掛けた。馬は嘶いて近づいてきて、凜の顔を舐めた。

（ただ者ではないとは、思っていたが、予想外だったな）

ゴートはそう思いながら、皆と一緒に山を降りて、村へと向かった。

18話　クローの温泉！？

「うわ～！気持ち～～！！」

そんなことを言いながら足を湯に漬ける凛を見てゴートはため息をついた。

（はぁ。お転婆娘の世話は焼けるな・・・）

あの後、昼食の時間までにクロー村に帰ってこれた一行は石化が解けた村人をとりあえず村の救護所に届けた後、未だに目を覚まさない凛を抱えながら村長宅へむかった。その道中、井戸に通りかかった時に目を覚ましたが、なぜか井戸を見た後、悲鳴を上げながら再び気を失った凛を「何かあったのでは？」と心配を皆でしながら急いで村長宅へ戻った。そしてゴートに言われ、部屋で凛の服をニヤニヤしながら脱がして怪我はないかを調べていたハンスが、服を捲り上げている時に目を覚ました凛に吹き飛ばされたなど、色々問題はあったが誰も怪我はなかった。

いや、最後の最後でハンスが怪我をしただけですんだ。

村長宅で村の危機を救ってくれた、ということで皆で昼食をご馳走になっている時にゴートは凛に訊いてみた。

「なぁ、凛。なんでお前はあんなところにいたんだ？」

「なんでって・・・。う～ん、なんでだろう？」

少しの間考えた後、凛は手をポンっとたたき、顔を物凄い暗くして答えた。

「夜中にね、声が聞こえてきたの・・・」

「ハンスのか？」

それに対してゴートはニヤニヤしながらそう聞き、その意図に気付いた凛は凛に吹き飛ばされ倒れたままのハンスを見た後、顔を真っ赤にして俯いた。

「ち、ちがうよ・・・」

「まぁ、冗談はそれくらいにしてだな、なんかあったのか？」

凛は「冗談か！！！」と突っ込んだ後、答えようとして口を開けたが、すぐに閉じてもっと顔を真っ赤にして俯いた。

そして、物凄い小さな声で聞いた？

「わ、笑わない？」

ゴートは怪訝な顔をしたが、『笑わない』と言い続きを促した。促された凛は昨夜の『お化け騒動』と自分のとった行動を話した。それを聞いたゴートは腹を抱えて笑い、村長達も笑いを頑張って堪えていた。といっても、肩は耐え切れずに震えていたが。

「笑わないっていったのに！」

それに対して凛は、顔を羞恥から赤くし、頬を膨らませた。それを見たゴートは内心ホッとしていた。

（いつもの凛だな）

村長宅で昼食を御馳走になった後、凜は申し訳なさそうに『お風呂とか、そういったものはないですか？』と、村長に聞いた。

「おぉ、すまんかったのぉ、気が利かなくて。」

村長はそう言った後、少し考えた後、答えた。

「あるにはあるがの、桶にお湯を張って布で体を拭うような物しかないの。王都の風呂のように体を湯につけれるような物はないんじゃ」

すまんの、と答えた村長に、『いぇいぇ』と、凜は答えたながら少し考え、村長に聞いてみた。

「この村って火山の麓？にありましたよね」

「あぁ、そうじゃ」

「じゃあ、温泉とかはないんですか？」

「温泉？」

聞かれた村長は、首を傾けた。どうやら知らないようだ。

（でも、知らないとは限らないか。違う名前で通っているかもしれないし）

凛はそう考え、温泉とはどういうものかを説明した。そこまで温泉に精通しているわけでわない凛の説明でも、大体どういうものなのか、想像出来たようだ。

「ふむ、温泉か。俺は今まで商人達から色んな話を聞いてきたが、お前の言うような物、温泉だったか？そんなのは聞いたことがないな。」

「そうですな。」

ゴートがそう答え、それを肯定するように村長が答えた。それを聞いたしばらく考えた後、凛は席を立ち、外に出て行った。その後を、何か凄いことをすると、考えた村長達と視察団は付いて出て行った。残されたゴートは、溜息を吐いた後、出て行った。

外に出た凛を待っていたのは純白の羽を持つ馬だった。

「えっ！何これ！？ペガサス？」

馬は、驚き目をまん丸にして驚いている凛に近づき、顔を凛の胸に摺り寄せた。驚いている凛に、どこからか声が聞こえてきた。

（（凛！！））

声は耳からではなく、直接脳に語りかけているような感じだった。

（えっ！？どうなってるの？この声直接頭に・・・。それにこの声どこかで聞いたことがある）

どこかというより、つい先程午前中まで聞いていた声だった。凛は

あの出来事を覚えてはいたがあえて思い出さないようにしていた。
凛は震える声で声の主に尋ねた。

（も、もしかして、し、シュティ？）

尋ねはしたが凛には答えは既にわかっていた。馬はそれに答えるように更に摺り寄せた。

（（やっぱり分かってくれた。また会えて嬉しよ、凛））

それを聞いた後、凛は馬、シュテルンの顔を泣きながら両腕で抱きしめた。

「シュ、シュティ！よかったよ！あの時はもう会えないかと思ったよ。う、うう」

凛はシュテルンが剣に貫かれて息絶えたのをもちろん覚えてはいたが、認めたくない出来事であったため、無意識に思い出さないようにしていたのである。
馬が何者かわからないゴート達は、馬に抱きつく凛を見て驚いてはいたが、太陽の光を浴びて清らかに輝く凛とシュテルンが女神とその愛馬の様に見え、我を忘れて見入っていた。
余談だが、ハンスを始めとする若者はシュテルンの顔がちょうど凛の胸の谷間に挟まれていたので、顔を真っ赤にし見つめていたとか。

（り、リン様って意外と胸あるな。）

その後、ゴート達にシュテルンの事を説明した凛は、もう既にシュテルンは危害を加えない事を伝え、それならばと村人達はシュテル

ンを今の間だけ村に置いておく事を了承した。王都に戻る時に連れていく事をお願いしていたが。
説明した後、凛は本来の目的である源泉探しを開始した。

「う～ん。どこだろ？」

凛は皆を引き連れて村や村の周辺を歩き回っていた。もちろん目的は源泉の発見である。
凛の後を歩いているゴート達は皆、スコップや鍬（くわ）など地面を掘るための物を手に持っていた。

３０分程歩いていたら突然凛が立ち止まり、ゴート達は訝しんで凛の様子を伺った。

「ん？ここかも・・・」

そう呟いたあと、凛は皆にこの辺を慎重に掘るようにお願いした。
「【女神の使者】様のお願いなら。」と、皆は進んで凛に従った。

「め、女神の使者・・・」

掘ること１０分。何か、卵が腐ったようなニオイが辺りに漂いだした。

異変を感じたゴートが凜に尋ねた。

「おい、リン！なんか変なニオイがするぞ！」

「うん！ビンゴ！」

それに対し凜はそう答え、皆を下がらせた。
皆がさがったのを確認したあと、村人の一人からスコップを借りて、
それを地面に力いっぱい突き刺した。

「おぉ・・・！」

そうスコップの刺さっている所から、少しづつではあるが液体が出
てきたのだ。

「ほぉ。水源を掘り当てたのか。」

それを見ていたゴートはそう言ったが、凜は『フフフ。違うよ』と
言った。怪訝な顔をするゴートに凜は言った。

「よく見てよ。ほら！湯気が起っているでしょ。液体も白く濁って
いるし」

「うぉ！ホントだ！・・・じゃあ、これがさっき言ってた温泉って
やつか？」

『うん、そうだよ。』と言った後、凜は皆に温泉の効力について説
明した。
そしてこれをこの村、クローの特産物のような物にしたらどうか、
と提案した。

「魔物とか出ないんでしょ？だったらここに旅館とか建てて、山の中でバーベキューや狩りをした後に、旅館と温泉でくつろいでもらう、とかさ。御飯には、自分の狩った動物を料理にだしたり・・・」

このような発想が出なかったのか、村人達だけではなくゴート達、視察団の人達も興味深げに真剣に聞いていた。

「木とかなら周りにいっぱいあるし、別に上質な木を使う必要もないしね」

『それに意外と現地の人達のような暮らしが体験出来た方が人気が出るしね』と言い、凛は皆の様子を伺った。

村人達と視察団はお互いに相談しあっているようだ。顔を見た限りではなかなか良い案だったようだ。

少し話し合った後、村長が恐る恐る話し掛けてきた。

「【使者】様。非常に魅力的な案じゃとは思う。じゃが、わしらにはどうやればいいのかよく分からんのじゃが・・・。」

村長の言わんとしている事を理解した凛は微笑みながら、

「大丈夫ですよ。ほったらかしにしようなんて、思ってませんから」

と言った。

それを聞いた村長達は顔を明るくした。

「と、ということは・・・」

「もちろん助言はしますよ。もちろんそのつもりでしたし。」

「「「あ、ありがとうございます！！！」」」

その後、いったん村へ帰り、村長宅に役人である視察団とこの計画に携わる者達の代表を集めて、凜は温泉施設、旅館などの概要を説明していった。

もちろん日本とハルクセイド大陸には文化の違いがあるので、『ここをかえた方がいい。』など村人や視察団の意見も聞きながら。

この会合の後に、ハルクセイド大陸、初のトレジャー施設がウィルヘルム王国の山の村クローで開設されるのだった。

もちろん黒髪の少女の提案によりウィルヘルム王国国王ウェールズが発行する身分証明書を持つ他国の人も利用可能である。

更に後には、黒髪の少女の発明により自宅で温泉を楽しめる入浴剤【湯の華】がハルクセイド大陸中の王族や貴族、特に美容に関心のある令嬢や夫人に大流行するのだった。

また自国の貴族より富んでいる他国の貴族が来てくれる御蔭でクローは潤い、その中継地となる村や町が繁栄し、それにしたがいウィルヘルム王国自体も潤っていったりするのだが、それはた別のお話である。

「そんなことよりなんで村長には敬語を使うんだ？」

「ん？それはもちろん年上の方だからだよ」

「・・・じゃあ、なんで俺には敬語を使わないんだ？もしかして俺が年上に感じないような馬鹿さがあるとかじゃねぇよな？ハッハッハ！！！・・・・」

「・・・・・・・・・」

「な！？ひ、否定してくれよ・・・」

余談だが、これは熊のような役人さんと黒髪の少女の対談である。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0284j/

女神の使者

2010年10月9日01時44分発行